女學雜誌

明治三十二年五月十四日發兌

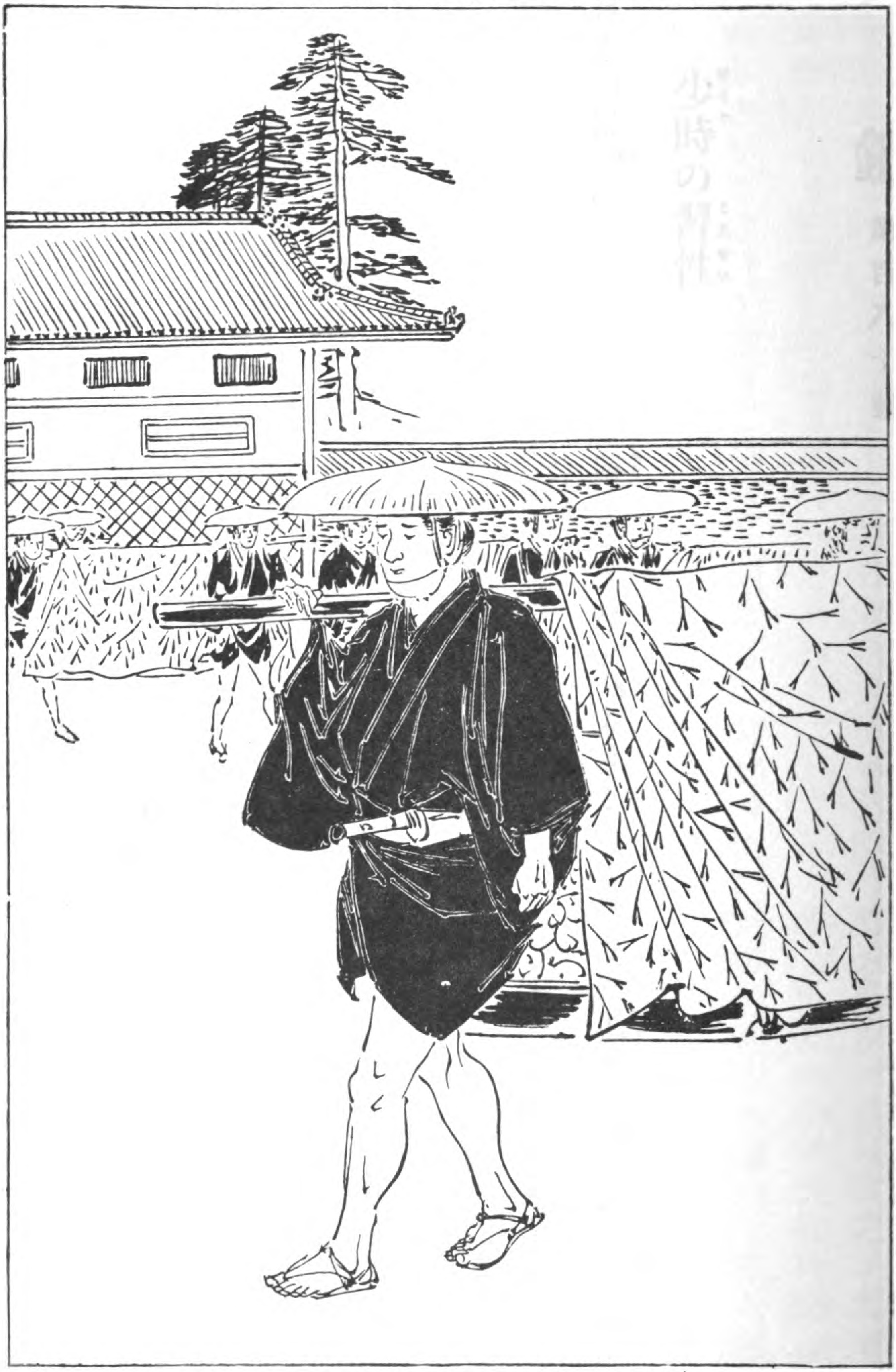
第百八拾號

東京女學雜誌社

女鑑第百八拾號

目録

薩摩中將光久の室



少時の習性

若きものは、いとのどけく、遊びすさびて、よきものゝやうに思へど、よに少年ばかりいそがはしきものはあらじ。取り分けて、女の若きものばかり、いそしきもの、また世にあらざるべし。然るに、世の人は、まだ若ければ、さやうに、つとめずともよろし。殊に、女子は、學も、能も要らずとて、いたづらに春風にまかせて、あだざくら、仇なる姿をのみ磨かせ、あだに咲かせ、あだに散らすが多し。いと口惜しき事なりかし、木も、木ぶりめでたく、よき花、よき實をたもたせむとには、二葉より、よくため直し、芽ざしの頃より、よく肥料かはずばあるべからず。二葉のころは、まだ早し、今少し大きうなりての後にためむなどとて、捨て置き、さて、幹太う、枝大きうなりたる後に、俄に、ためむとすとも、性こはくなりはてゝ、またたむること

難く、花を生じ、實を結ぶやうになりて、俄に肥料かふとも、何かはせむ。されば草も木も、二葉よりためずばあるべからず。芽ざしより肥料かはずばあるべからず。人間も、また、生れしより、よく教へ、よく導かずばあるべからず。まだいわけなし、まだ少しとて捨て置くうちに、いつか壯年に成り行き、また、ため得まじき人となりなむ。而して、人間は、習ひの性と成るものにて、しかも、よき習はしを、惡しくするは、容易けれど、惡しき習はしを、よくためむ事は難し。又人間はすさみやすきものにて、非常の勉強家も、怠惰には移り易きものなれど、怠惰の小兒をして、勉強の壯年となさむことは、實に容易の事にあらず。人は云ふ少時にあまり勉めさすれば、身體虛弱となると。されど、少時より、つとめたるものは、壯年に務むるとも、あまりに、其の身を害せざれど、少時怠りたるものをして、壯時俄に勉めさせよ。かつて、こらしゝ事なき腦をしげきし、にはかに、煩悶苦痛遂に亂れて糸の如くなり、果はなほ解く能はざる人となりぬべし。少時に極て、つとめさするもわるけれど、怠惰に流れしむるは、一層よろしからず。壯時、其の人のかしこくなるも、

愚になるも、少きより習ひ來りし性によれるものにて、考ふれば、少時は之が植ゑつけの時にて、肥料をかひ、早く之をひき、之を植ゑつけ、時を失はぬやうせずばあるべからざることゝ、さながら五月に早苗をとるをいそぐ如くにして、いそしさ、又云はむ方なかるべし。それよりあたら莠草におされぬやう、暑のあつきにも、間草を刈り、毒蟲をさらずばあるべからず。さて、秋は壯時なり。實を結びたる後には、少しは刈ることとたゆみれくるゝとも、大なる害もなかるべし、人間もしかなり。壯時は、反つて、その心に貯あれば、少しは、遊びたはむるとも、中々に實入るはかりにて、さのみは害にもならざるべし。たゞ少時をいそぐべし。賢き人とならしめむには、必、規則を設け、怠惰の性となさしめず、壯時、悔ぬやうにつとめ勵ますべし。殊に女子は、壯時、男子より、早く、男子は其の學ぶべき事、終始一なれど、女子は學ぶ折少く、早く人に嫁き、家を治め、子を育くみ、舅姑に仕へ、くりやの事、たちぬひの業、執るべき細事の最と多ければ、又學を問ひ、能を増さむいとまなかるべし。而して、女はやがて細君、細君なれば大事をとらずともよしとする人あれど、大のもとは小に

て、細君、又、夫を助け、子をはぐくみ、おのづから、國家に大なる關係を有する身なり。かしこからずはあるべからざる身なり。能なくてはならぬ身なり。故に少時より、男子に優りてつとめずはあるべからず。勉めて、才智を貯へ、善道を知りおかずば、他日美くしき妻とも、賢き母とゐなることと難かるべし。つとめよや、少女。心せよや、少女持ちたる母よ。



論説

女子の就學を增加する方法

北村重敬

予は一國文化の隆否は略女子教育普及の程度如何と比例するものなることを信ずるものなり。故に年來女子教育の爲には窃に心思を勞したること少しとせず。頃者世上に女子の就學を增加せしむる方法につきて嘖々たるものあるを聞き。茲に愚案を草す。看者幸に一讀の榮を賜はらむ幸甚なり。

女子の就學尠少なるは、第一父兄未だ女子教育の大に必要なることを知らざること、第二女子教育に適當なる設備なきことの二大因に基くものなり。予は此の二大因に對して左の八件を呈出すべし。

第一　女子教育の必要なることを父兄に知らしむること。

女子教育は何が故に必要なるか、予輩は左の諸項を答ふるに躊躇せざるべし。而して其の内容の詳細は簡を欲して省略す。讀者一考して可なり。

1、家庭の圓滿を圖るが爲に必要なり。
2、家事を整理せしむるが爲に必要なり。
3、家庭教育をなさしむるが爲に必要なり。
4、離婚の風俗を矯正する爲に必要なり。
5、女子の品位を保全する爲に必要なり。
6、男子の品位を保全する爲に必要なり。
7、社會の風紀を保全する爲に必要なり。
8、男子をして國事を盡さしむる爲に必要なり。
9、情死の如き醜體を豫防する爲に必要なり。

10、國富を圖るが爲に必要なり。

以上の如き必要を父兄に知らしむることは、決して一朝一夕に於て之をなし得べきものにあらず。予輩は、左の諸策を献せざるを得ず。

1、新聞雜誌は勉めて女子の就學を奬勵すること。

2、學校の諸儀式には父兄を招きて女子就學の必要を談ずること。

3、神祭其他休業日を利用して敎育談話會を開くこと。

4、敎育幻燈其他の手段を施して女子就學の必要を談ずること。

5、敎育展覽會其他の手段を施して女子手藝を縦覽せしむること。

第二　女子の性質に適合する敎科を加ふること。

現在尋常小學校の敎科は、一も女子に特別なる智識技能を敎授する敎科を存せざるのみならず、一般の敎授も、すべて男生徒のみの爲にする憾あり。偶裁縫科の加入を許せども、これとても必修科にあらず、亦實際に於ても加入せるもの甚少し。女子の性質に適合するものは、唱歌、及家事なり。特に家事を以て第一とす、予輩の家事といふ内には、從來の裁縫、家政、料理、其他家庭に於てなすべき事項の初歩を包含せるものなり。而して第一年より之を必修科となすを要す。次に敎授の程度は、第一學

年に在りては、衣服の疊み樣、室内の掃除法等の如き、最も簡易なる事項の談話、及實演をなさしめ、從來の修身敎授と大差なからしめ、二學年に在りては、女子のなすべき職業、女子の心得等より、簡易なる折紙其他器物の取扱法を敎へ、兼ねて女子の最も好む紙雛育兒法等を敎へ、三學年よりは裁縫を課し、簡易なる家政の一斑を敎へ、四學年に在りては裁縫の外に、簡易なる家政料理等を課すべし。此の如くすれば、女子は知らず識らずの間に好學心を起すに至るべし。

唱歌家事は是非共女子の必修科となすべし。唱歌は設備を要し、家事は稍困難なりといはゞ、余輩は先づ第一着として裁縫のみを課することを主張して已まざるべし。

第三　女子敎育は直接的實用を以て主眼となすべきこと。

女子敎育の方針は實用的なるべし。理論的なるべからず。技藝的なるべし。學理的なるべからず。生産的なるべし。不生産的なるべからず。彼の漫に學術を喋々し、高尚を慕ふが如きは予輩の採らざるところなり。固より文運の進むに從ひて、女子大學の必要之あるべしと雖、先中等程度の技藝學校を多數ならしむることを以て至當なりといふべきなり。されば、現在の高等女學校も、技藝科の時間を多くして、有用の女子を養成することを勉むべきなり。

第四　女子就學の目的物を定むべきこと。

現在の女子は、唯何等の目的なくして就學せるものなり。假令或目的を有すとも、其目的に適合する場所位置は甚少し。見よ、男子は小學校を卒りて、各種高等専門の學校に進み得べきに係らず、女子の進み得べき所は甚少し。固より女子は孤立的に生活を營むべきものにあらざれど、苟も修學せる以上は、前掲第一項の利益あるものなりと雖、これ未無形的效果なれど、更に他に有形的利益、即女子自營の途を得しめざるべからざるなり。されど、女子に必要なる各種學校を設立するは志士仁人の義務なるべし。

女子就學の便利を圖る爲には、女子師範學校、高等女學校、女子實業補習學校を初とし、裁縫學校、家事學校、機織學校、養蠶學校、製絲學校、染色學校、割烹學校、音樂學校美術學校、産婆學校、看護學校、媬姆學校、乳母學校、下婢學校等を設立するを要す。此等は單に官公立にのみ待つべきものにあらず。教育會其他有力なる協會の附屬として設立するを得べきものなり。或は又西洋諸國の例に倣ひて、會社組織となして其資金を募集し之を設立するも亦妙なり。

第五　女教員を聘雇すること、

女教員は、例へど、女生徒の就學を増加せしむる囮なり。固より女生徒と雖、全然女教員を

愛するものにあらず。或は却て男教員に敬服するもあれども、一般に於て、教師もし女子なりせば、自分も亦成長せば女教員たり得べしといふに至るべく、從て女生徒の奮勵心を生すべく、特に女教師は女子に適切なる教授をなし得べき利益あるものなり。

近來女教員に關する風評諸方に起り、師範學校女子部を廢止し、或は廢止せんとするものあり。これ實に慨すべきことなり。女子の教師として適當なることは、予輩の夙に稱導する所なり。特に准教員として最適當なるものなり。況んや近來國運愈勃興して男子の需要益煩多ならんとする今日に於てをや。予輩は各府縣必ず女教員養成を斷行すべきことを主張するものなり。而して其養成方法は最簡易を主とし、地方費の補助を減少にし、服務の年限も之を短縮して、女子固有の天職を保全せしむるに便ならしむべきなり。

第六　一般の女子を尊敬し女子の職業を保護すべきこと。

男尊女卑は野蠻の遺習なりと雖、男女同權は一個の空想たるを免れず。予輩の所見を以てすれば、我國現在の有様に於ては、大に女子を壓伏する嫌あり。早く女子の品格を認めて、之を尊敬し之を禮遇すべきなり。特に特別の經歷ある女子は、一層意を用ひて優遇すべきなり。而して女子のなすべき職業は、務めて之を保護して男子の侵略を豫防すべし。今西洋の例に徴するに、理髮師、文具商、小間物商、吳服商、寫眞師、畫工、彫

刻師、産婆、齒科醫、看護婦、旅宿業、飲食店、音樂師、裁縫業、機織業、小賣業、小工業等の如きものは女子の堪へ得べき職業なり。

第七　女子の就學者に便利を與ふべきこと。

直接に女生徒に好學心を起さしむるものは、第二項及第四項なり。直接に父兄に便利を與ふるは本項なり。如何にして女子就學者に便利を與ふるかといふに、女生徒の授業料は男生徒の半額となすことこれなり。女生徒の服裝を制限して華美に流れしめざるが如きこれなり。更に女生徒の爲には其他出來得べき限りに於て特點を附與するに在り。

第八　子守學校を設立すること。

女生徒の半途退學者を見るに、年齢未だ弱少なる故に、一人前の職業をなすものあらず。僅に子守をなす位なり。而して貧家の女子は子守となりて糊口し、或は弟妹を看護するが爲に多くは半途退學の不幸に遇ふものなれど、子守の數は比較的に多きものなり。されど、午後若くは夜間に於て、此等子守の爲に修身讀書算術習字の初歩を敎ふるは實に刻下の急務なり。校舍敎員の如きは、尋常小學校を充用し、其敎員に囑托して可なり。僅に子守の使用すべき文具其他消耗品を公費或は寄附に仰がば事足るべし、世間幾多の眞敎育家幸に一臂の勞を辭すること勿れ。

以上八件は固より斬新なる考案と稱するに足らざれども、敢て識者の補正を請はん爲にこゝに補綴せり。看者幸に之を諒せよ。（四月十四日稿）

女徳のしをり（二十五）

三輪田眞佐子

第六　禮儀及作法

禮儀は天理の節文なり。作法は人事の儀則なり。若し世に處し人に接するに當り、禮儀なからんか、忽ち萬物の靈長たる人格を失ふに至るべく、亦業を執り身を攝するに當り、作法なからんか、則ち日時の進退にも秩序を欠くに至るべし。わきて節文を重んじ、儀則を守るべき本分を有する女子には、禮儀と作法の肝要なるは言を待たざるなり。されどにや、夙に我國の女子は、禮式とて、この二つのものを修むるぞ常なりける。されど、おのれは、そを女子の身体に關係する女徳の一に止まるものと信ずれど、今茲にものするなり。決してこれのみを修むるを以て女徳の全般尽きぬとな誤りそ。反りて一般の女徳より見るときは、禮儀及び作法は九牛の一毛に比すべきのみ。蓋しこれまで女徳を講究するものは、いまだ注意周到ならざるを以て、獨り外形に現はるゝ禮儀及び作法のみを以て女徳の一般となしけん。されど、今よりは、そを女徳の一部分として講究するを以て至當と思ふなり。

そもそも禮儀及び作法は、外形上のことながら、熟々考ふるに、前者は心の敬の動作に表はるゝものにして、後者は事を行ふ方法の宜しきに適ふものなれど、おのづから、心の高下、智の大小は、その禮儀并にその作法を以て卜知すべきなり。中庸に、大なるかな聖人の道や、洋々乎として萬物を發育し、峻く天に極たる、優々として大なるかな、禮儀三百威儀三千、その人を待ちて而して行はる、故に曰く、苟も至徳ならざれど至道凝せずとあり。故に、心の至善ならざるものは、たとひ禮儀に精しく、作法に巧ならんも、見るに足らざるべし。されど、總て心に盛徳なうして機械的に禮法を外に形づくるものは、反りて耻づべきものぞかし。唯能く徳性を養ひ、沛乎として精微高明の禮儀と現はれ、端正和須の作法と見ゆるこそ良けれ。

今逐一、女子の坐作、進退、あるは物品の受授、あるは冠婚喪祭の大禮、若しくは日時の交際上などにつき、その心得を説き、儀式を述べんか、千種萬別の方法ありて、殆ど際限なかるべし。されど、そを悉く學びて、始めて世に立つものとせんか、いまだ學び終らざるとき、既に老を感ずるに至るを如何せん、亦かゝることを豫め學ばざるを得ざる女子ならば、迂遠にして應用の才識なきものといふべし。

されど、先づ、禮儀及び作法の大綱ばかりを學びて、臨機應變の動作こそあらまほしけ

れ。

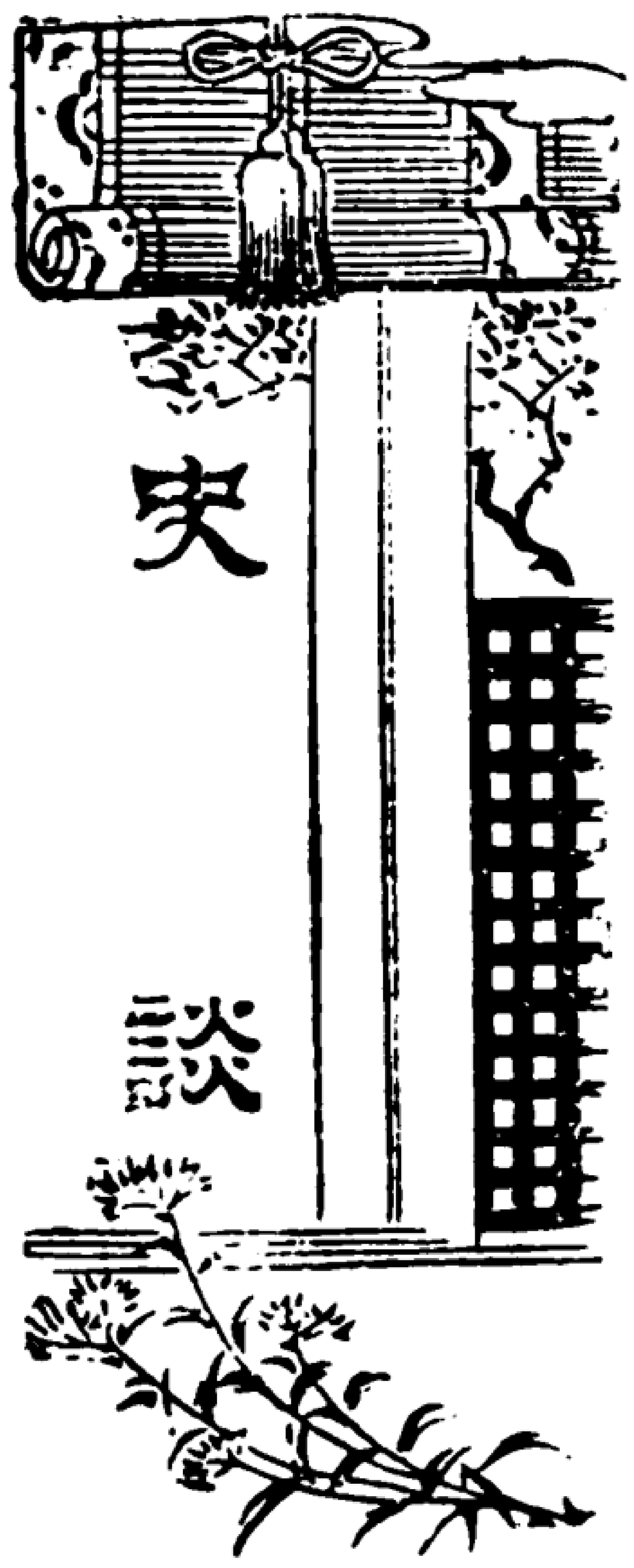
先づ禮儀及び作法は、自然を標準とすべし。論語に、禮之用和爲貴とあり。すなはち、和とは從容迫らざる意にして、禮儀はわざとならず内に積る盛德の外に表はるゝを尊ふべし。作法は日時のことと逆を避けて順に就き、つねにその處置宜しきを期すべきなり。次に善良なる習慣を以て標準とすべし。凡そ習慣は、多數の人が行ひ來りし風儀なれば、これを弊害なき限りは守るべし。見よ、世の常習を盡さば、敬意を人に通ずること易きを、若し違例の行あらんか、交情を破る恐なしとせず。但し禮は奢らんよりは寧ろ儉せよとの敎あるが如く、奢侈を以て禮儀を表するがごとき故例あらば、疾くこれを改めて、適當なる法を行ふべし。亦酒席などにて、杯の交換より傳染病の流布する恐ありとかや。されば、かゝる習慣は改むべし。なほこれに類する惡習慣を以て、禮儀となして改めざる如きは、禮儀の進步を知らざるわざぞかし。

近來は實利のみを尊び、風韻雅致の分子日に衰へ、殆ど盡きなんばかりなるは慶事にあらず、おのれは物質界の文化に伴ひ、精神界の文明こそ望ましけれ。されば、苟も文明の女子たらんと願ふものは、行は禮儀に適ひ、事は作法に由るべし。若し禮儀亂れ作法破れんか、たとひ身に錦繡を纏ひ、口に珍味を食はんも、野蠻時代と擇ぶべきところな

かるべし。

（附）本題女德の玄をとりは、頗る長篇なるを以て、若し全篇をものせんには、なほすがの根のながき年月を要すべけれど、讀者も飽きけん、亦厭ふらん、おのれさへ倦みぬ。由りて筆を茲にとゞめ、次回より別事をものすべし。

（完）



薩摩中將光久の室

鹽井ふく子

おもしろの春雨や、花の散らぬほど降れ、おもしろの酒盛りや、心みだれぬほど斟めとは、むかしのある書の讃の詞と聞きつるが、樂には、すさみ易く、すさみて、前後を忘るゝもの、いと多し。此の頃わが門を過ぎ行く花見客の多くは、花に心の奪はれけむ、酒に心の亂れやしけむ、其の歸るさのさまの見苦るしきが多し、分けて愼なくては、かなはぬ婦人の酒に醉ひどれ、つくるべき顏色を、赤鬼のごとくし、ざくろの如き口にざれ言を云ひつゝ、ざれうたを歌ひなどするさま、見苦るしとも見苦るしく、あたら大和心の花、一際とく散る心地せらるゝも口惜し。薩摩中將島津光久の夫人陽和院と號するは、はじめ承應帝に仕へまつりて、勾當の內侍と聞えたる人なるが、人となりかしこくて、容姿もまた美くしく、敷島の道にも勝ぐれ、雲井にもいとけ高きあり難き姬松なりき。中將此の女房を見そなはし、其の志のほどなどめでさせ給ひ、かやうの女

を娶りて、家をも國をも治めむ助けとせむやと思ひ、此の事を云ひ入れけるに、内侍云ふやう、よろしく一萬兩を出し、重く嫡夫人の禮を以て迎へなむ行かむと。此の時、王室、幕府に押されて、大内山は、さながら、浮き雲にふたがり、女房どもは、さながら女郎花の野にはえたらむ如く思ひ輕んずる中に、内侍はひとり、身をれとさず、かゝる言を以てしたるは、げに朝廷を重んじ、身を重んじ、人を重んじ、婚姻の法を重んじたるなり。

光久、その金を望みたるに、一度はれどしめたれど、之や大名の法なりけむ、後に之を知り、乃ち金一萬兩を贈り、禮を厚うして、之を迎へたりとぞ。内侍、乃ち薩摩に下りてよりも、偏に身を重んじ、禮を亂さず、かしこきに賢きを加へて、夫を助け、つゝしみに愼しみを加へて、己を制し、陽和の院と稱せられて、誠にめでたく家をも身をも治められたり。

婦人ある時、侍女をいましめさとしけるやう、今の若き女の、花見、寺参りとて、風流に出て立つは、皆人に見られに行くなり。女の行儀にあらず。内裡のむかしも今も、皆女御たちの禮として、檜扇をひらきて、之をかざし、姿を人に見せざるを以て、つねとせり。しかるに、今の若き女人は、綺羅を競ひ、頻りに形をつくりて、面をあらはにし、人に見するは誠に耻かしき事ならずや。最も男は心うつくしく、女は姿美しきものと云へど、たゞに姿のみ美はしとて、其心美くしからざらむには、眞の美人にあらず。然るに其の粧のみに心を入れ、姿の美くしきを人に見するも、之を識る人は、其の心の醜くきを笑はんのみ、寔に口惜しきことならずや。されど、まづ花を見んと思はゞ、人なき所の花を見よ。寺院に詣るならむ、本堂より奥に入るべからず。僧都にも、十戒を守れる者は少なしといへり。誠や、今の花見寺の如き、三味をひき、はうた歌ふを拒まず。あはれ、此の上にも、とつ國人、となりに家をしめ、恣に其の國振りをはこらむ、流れやす

き人の心、いよ〳〵國を亂し、世を狂はしめむ。心ある女子よ、此の陽和の院の言の葉を重んじ、此の内侍の如く、身を輕んぜず、吹きすさぶ嵐にも、ちりにだもけがされで、いつまで草のいつまでも、我が美くしき國ぶりに習ひ給ひてよと、いのるばかりになむ。

小野田久之進の妻多加

山本正周

小野田久之進の妻多加は、後に、吉原の名妓瀨川といふ。南都の醫師、大森左膳といへりし者の娘にて、年十餘歳なりける頃より、才色人にすぐれたりけるが、與力玉井某の奴源八といへる者、ふと多加をかいま見てより、戀慕の情止みがたく、しばしば、人に託して、艶書を寄せしかど、家訓のおごそかなる家に、人となりし多加は、何とて、かゝるいまはしき物に、手を觸るべき、何のいらへもせずして、打過ぎけるが、かくても、なほ、源八より、さまざまと言ひ寄りけれど、多加は、いたく、之を辱めたりき。源八は、我が戀のかなはぬのみか、恥辱を與へられしを、遺恨に思ひ、或る夜、ひそかに、一頭の鹿を殺して、大森の門前に捨て置き、己れは、何處ともなく、逐電しけり。しかるに、奈良にては、鹿を殺しゝ者は、重き罰に處する掟なりければ、此の事、公の沙汰となりしが、つゆ知らぬ事ながら、言ひとくべき証據なきものから、あはれ、大森一家は、無實の罪によりて、奈良を逐はれけるは誠に、不慮の災難といふべく、源八の行、憎みてもなほあまりある事なり。かくて、大森一家は、詮方なきまゝに、京都に遷り、幾程もなく、また、大阪にさすらひ來りて、うき月日をぞ送りける。父右膳は、ふと病にかゝり、わづかのわづらひにて、みまかりけり。是より後は多加は、その母と共に、わびしく暮しゝが、鯛屋貞柳といへる者ありて、亡き父の知りあひなりければ、母子の困難を見るに忍びず。何くれとなく、之を

勢はり、遂に、其の媒介によりて、多加は、城代内藤氏の士なる、小野田久之進といへる者に嫁きけり。しかるに、小野田の家は、其の後、幾程もなく、江戸に移りけれど、多加も從ひて、江戸に入り、其の母をも、呼び迎へ、やゝ、安樂に日を送りけるは、眞の夢の間にて、又もや、まがつみのわざはひの、其の家に起りしこそ是非なけれ。そは、他にあらず。或る時、夫久之進は、君命によりて、金四百五十兩を懷にして、大阪へと出立せしが、幾程經ても、歸り來ず。また、一度の音信だになければ、さま〴〵に、手を盡して、其の樣子を探りけるに、夫は、江尻の驛にて、賊のために、横死せしとの事、明白になりければ、多加の悲、驚は、筆にも盡されず。その涙の、いまだ乾かぬ間に、其の家より、離縁せられしかば、多加は、重ね重ねの不幸に、身の置き所もなく、其の實母と共に、路頭にさまよはんとせしを、金七といへる俠氣に富みたる人ありて、多加の母子を引き取りて、肉身も及ばぬ親切をぞ盡しける。母子は、げに盲龜の浮木に逢ひたる心地して、金七の家に身を置き、その世話を受け居りしが、又もや、或る夜、その隣家より火起りて、金七の家財、諸道具、みな、灰燼となりければ、金七は、その妻の弟なる君太夫といへる者の家に、身を寄することとぞなりにける。多加は、大恩受けたる人の、かく俄に零落せるを見るにつけ、身も世にあらぬ心地しけれど、遂に、かうよと心を定め、老母を君太夫に託し置き、身を新吉原に沈めて、妓となり、身の代にて、金七の窮を救ひけり。かくて、多加は、吉原に出でゝより、瀬川と稱せしが、固より、才色、並なき身にしあれど、全盛亦、並なかりき。瀬川、かゝるなかにも、亡き夫の讐を探り出でん手懸りもやと、人知れず、心を碎き居たるこそ殊勝なれ。或る時、三人の遊客ありていづれも、士の風體なりけるが、其の錢の遣ひざまといひ、其の擧動といひ、何となく、いぶかしき節の多かりければ、瀬川は、それとなく、心を注ぎ居たるを

それとも知らず、三人の士は、連日の酒宴に飽きはて、鎌倉見物を思ひ立ち、樓主を呼びて、所持の黄金を託し置かんものとて、印形を樓主に渡しけるを、瀬川は、傍に在りて、ふと之を見れば、心覺えある印形なるに、かねて、肌につけ居たる、亡き夫の印形を捺し在りしと、較ぶるに、寸分違はぬのみか、其の佩刀も、また、夫のなりければ、飛び立つばかりの胸をれし靜め、急に、人を馳せて、金七に報じけるが、待つ間遲しと、心を定め、兼ねて用意の短刀を閃かし、源八目がけて、斫りかけゝるに、他の二人の士は、驚きて、之を遮り留めんとせしを、はねのけ、あはや、源八の喉を刺さんとしけるとき、樓主は、何事ならんと慌しく馳來り、此の狀を見て、急に之を押し止め、手續を履みて、奉行所に屆け出でんとしける折に、金七、恰も、馳け付けければ、三人の士をいましめ、奉行所へさし出しけり。後、しばしば、尋問を經て、三賊とも、包むに由なく、遂に、罪狀をあからさまに、白しければ、獄門に梟せられ、金七、君太夫は、褒せられ、瀬川も、金を賜はりき。後に、瀬川は、髮を剃りて、尼となり、自貞と呼び、さゝやかなる庵を、淺草に構へて、之に住み、述懷の歌など、壁に掲げ、行ひ澄まして一生を終へきとなん。川竹の身には、稀なる烈女といふべし。



茶の湯

茶禮初學

孤峰庵碌仙齊不羨
關　葦雄

次に亭主道具出すことも、客見ることも、前號に掲

げたる如し。さて右拜見濟たらば、客方は慇懃に辱き事を申述べ、暇乞して立歸るべし。其詳細は第百七十六七號に爾したる如し。是にて正午の茶の湯一會始終は結了したり。されど、筆の及ばぬふし〴〵、讀者の了解に苦しみ給ひしも多かるべし。かゝるは包臟なく本誌に就て質議を求められん事をのぞむ。

茶道を學ぶに付て注意

茲に一會の茶の湯の法を解き了るに臨み、特に諸孃に注意すべきことあり。そは他にあらず。抑、茶道の本義は、只に手足の上下、身體の擧動等の末技に在らずして、要は精神の修養にあり。精神淸淨なれば、技自ら達し、起居禮に適ひ、進退宜を得、口辨諂はず。是斯道の本分なり。器具の善惡、室の適否等は、蓋、枝葉のみ、往昔、足利將軍義政公茶道を好み、文明年間有二僧珠光者一、住二南都稱名寺一。公召問曰、茶事可二得而聞一也、答曰、源非二乎遊一非二乎藝一非二放樂一矣、且大禮設レ食、小禮則飲、飲者非二酒漿之謂一也、鼎、湛二溪澗之甘泉一、爐燒二池田之香炭一、漢器茶甌、高麗盞、結レ草作レ廬、示二陋巷之樂一、聚レ石築レ庭、表二深山之趣一也、重問次第如何、曰、古之所謂道猶路、凡物之所二以通行一者、皆名レ之曰レ道、合レ于レ茶曰二茶道一、次第君子由二所レ貴之飲禮一、爲二次第意風一者、因二陸處士一也云々。丞、答、公曰、得レ聞、善哉茶道之稱、實茶禮之號、亦然、說二茶道一者、莫レ明二於此道一、莫レ正二於此禮一矣。是則茶道之本躰なり。點茶の巧なるも、道具の名物なるも、此の道に反する者は吾能知らざる也。故に余は、本誌所載女德のしをり三輪田眞佐子先生の說を贊し、女子は風采を修めて高尙に感化せられんことを望む。徒に假裝の美を競ふて、只流行に遲れんことを怖るゝ現今の婦女子、信に茶道の本義を解せば、必先づ自ら愧ぢん。世の、器具に高金を費し、口に美味佳肴を食して、以て茶の湯の會と思ふが如きは、珠光以來、紹鷗、利休、遠州侯、石州侯の教訓に背きたるものにして、誠の茶道には非ざるなり。

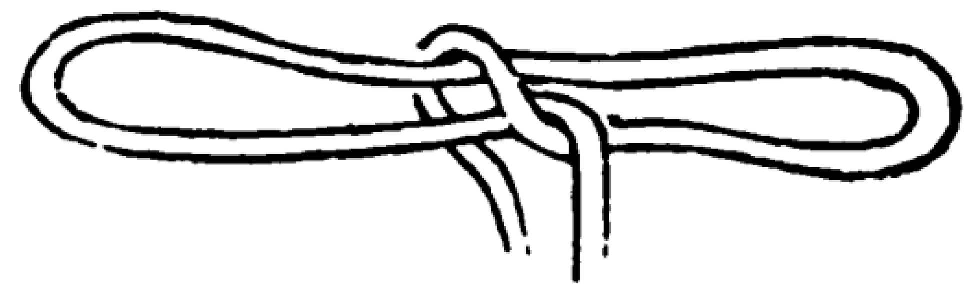
新撰結物百種

百草庵一無

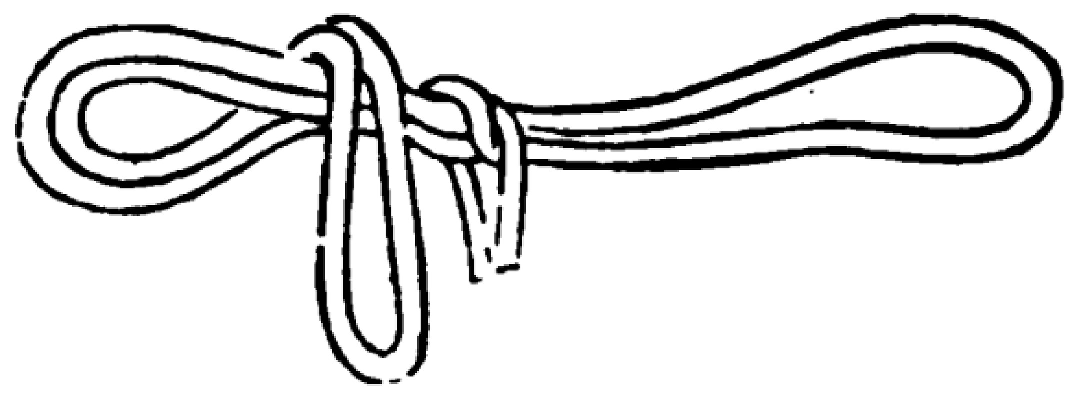
封結 34

茶入の袋の紐に用ゐ來れり。當世は重に小兒の巾着に用ゐる。其他何に用ゐても便利よし。

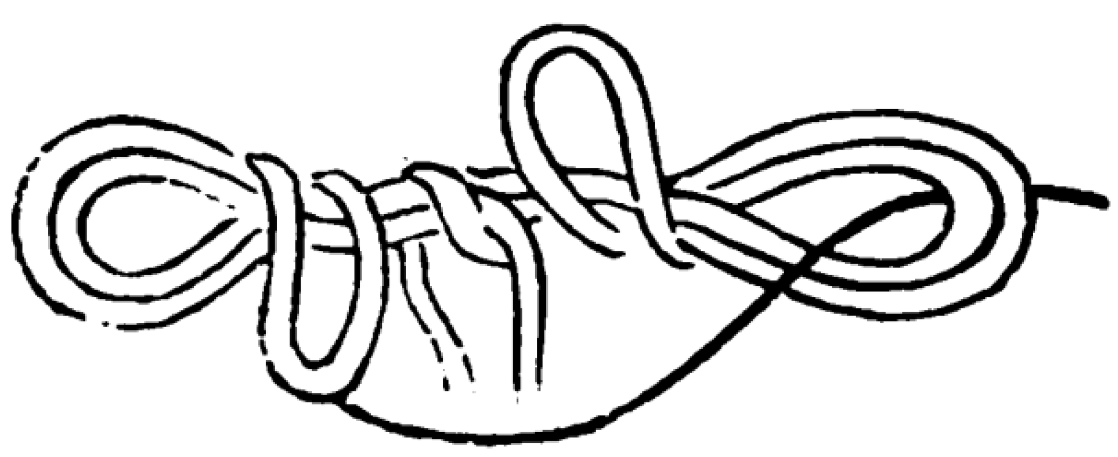
第一圖



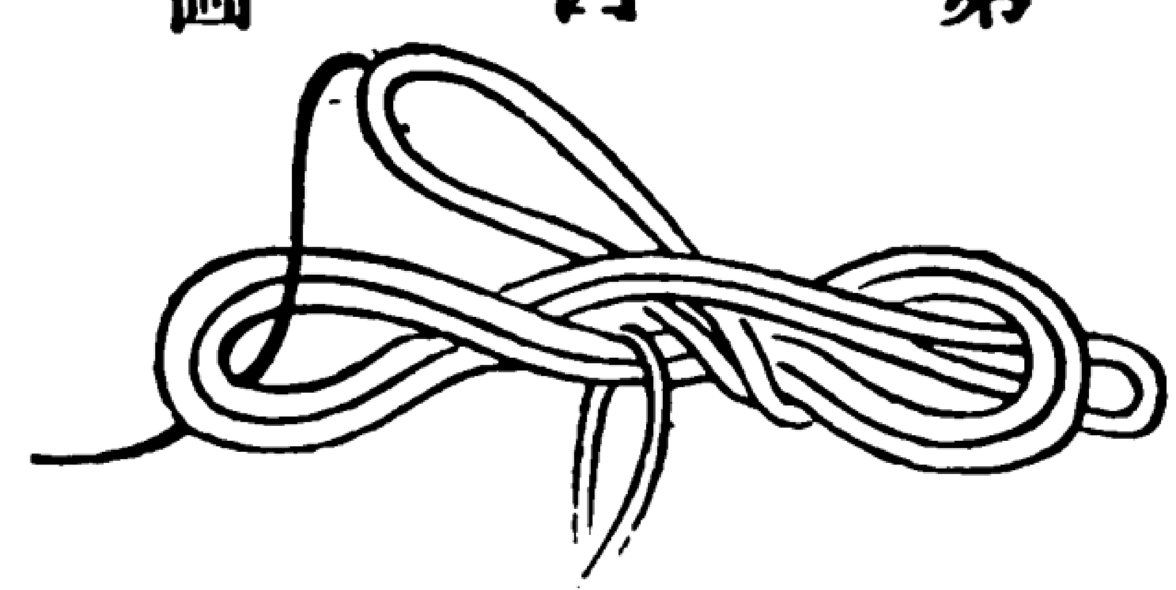
第二圖



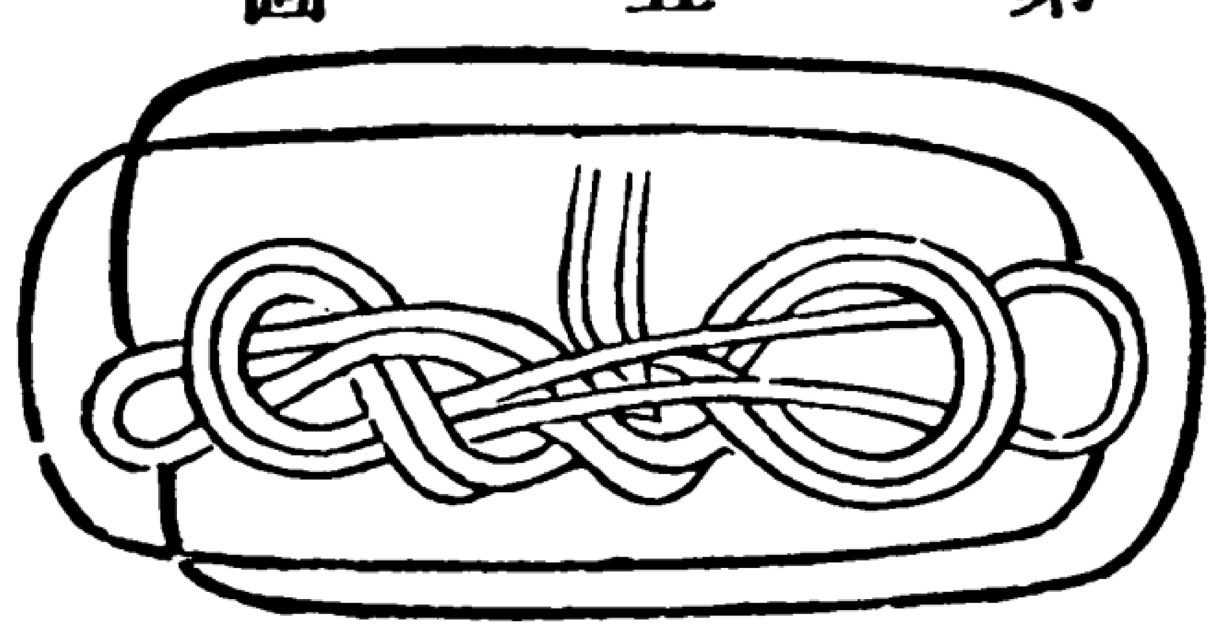
第三圖



第四圖

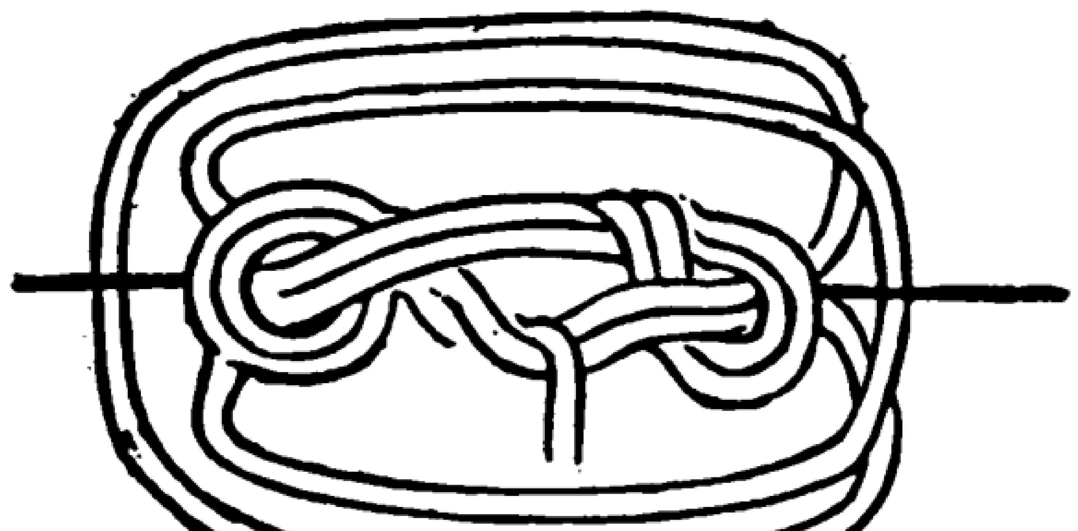


第五圖



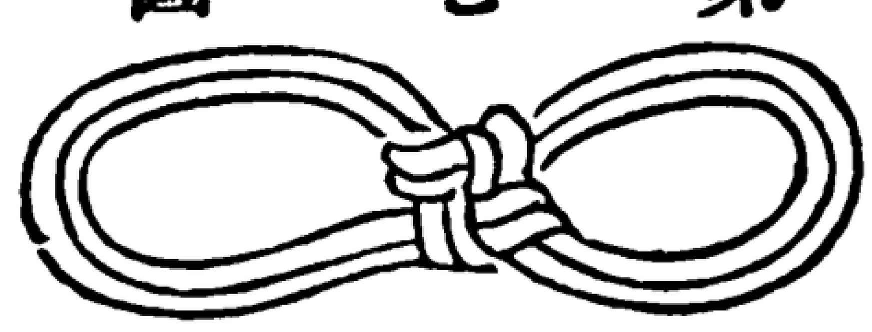
成る可く引き締て黒線の如く兩方に引き反す時は第六圖となる

第六



兩方の黒線の處を引き出せば第七圖となる

第七圖



結び上り

たちぬひ

西山たい子

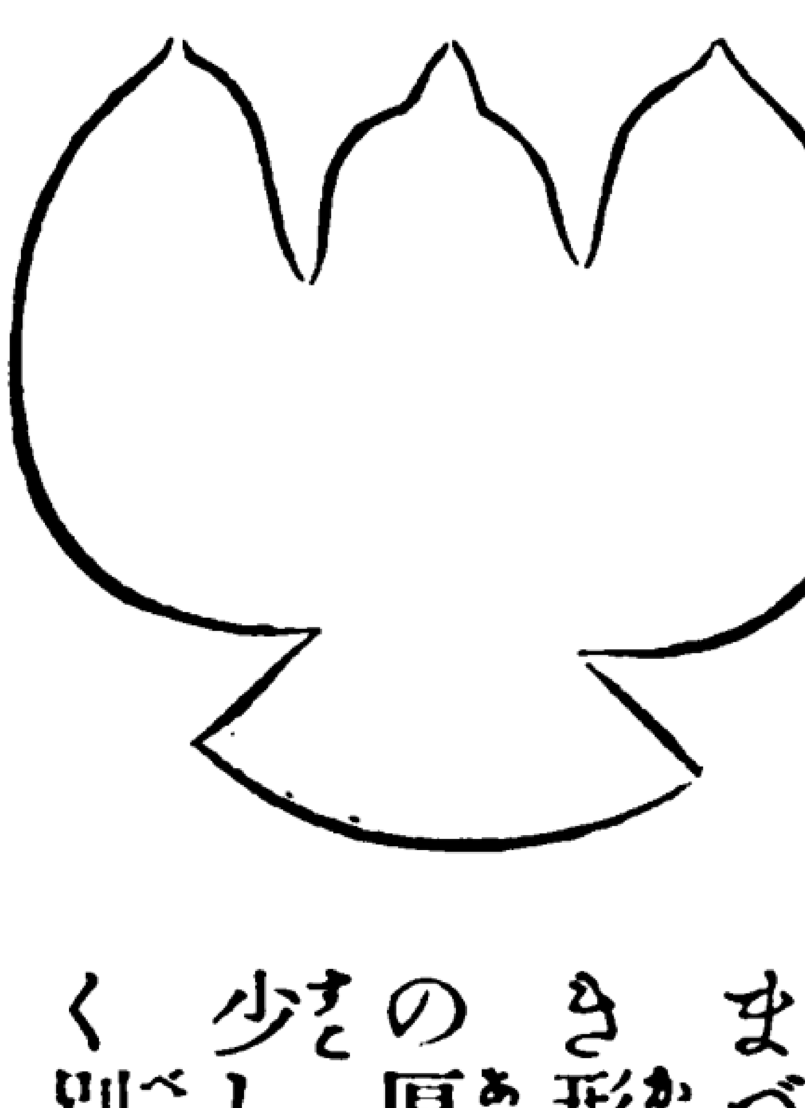
(百九)　袷帛紗

袷帛紗は、よろづの祝儀、不祝儀等の禮式に用ゐるものにて、いとむづかしきものなり。その祝儀に用ゐるものは、裏紅にして、不祝儀につかふものは、裏を淺黄、黑、白等のかはり色になすなり。切は縮緬、羽二重等も用ゐれど、信は、鹽手を以て帛紗地となす。まづ何れにても切をとり、寸尺を定め、つねの縫ひ物の如く表面を内に入れて、四方共に四角にぐるりとぬひ、さて、四角を正しく折り、綴り付け、之を引きかへすなり。かやうに四角にぬひては、何處よりも引きかへすべき所なきやうなれど、たゞ一方を、他より三四針の大針にぬひおき、此處を叮嚀に開きて、一角づゝ徐徐に引き出し、かへしたるあとを、よく正して、しつけをかくれど、其痕跡を見ずと云ふ。之は、元來傳授と云ひて、裁縫家のゆるしものとなしたるなり。

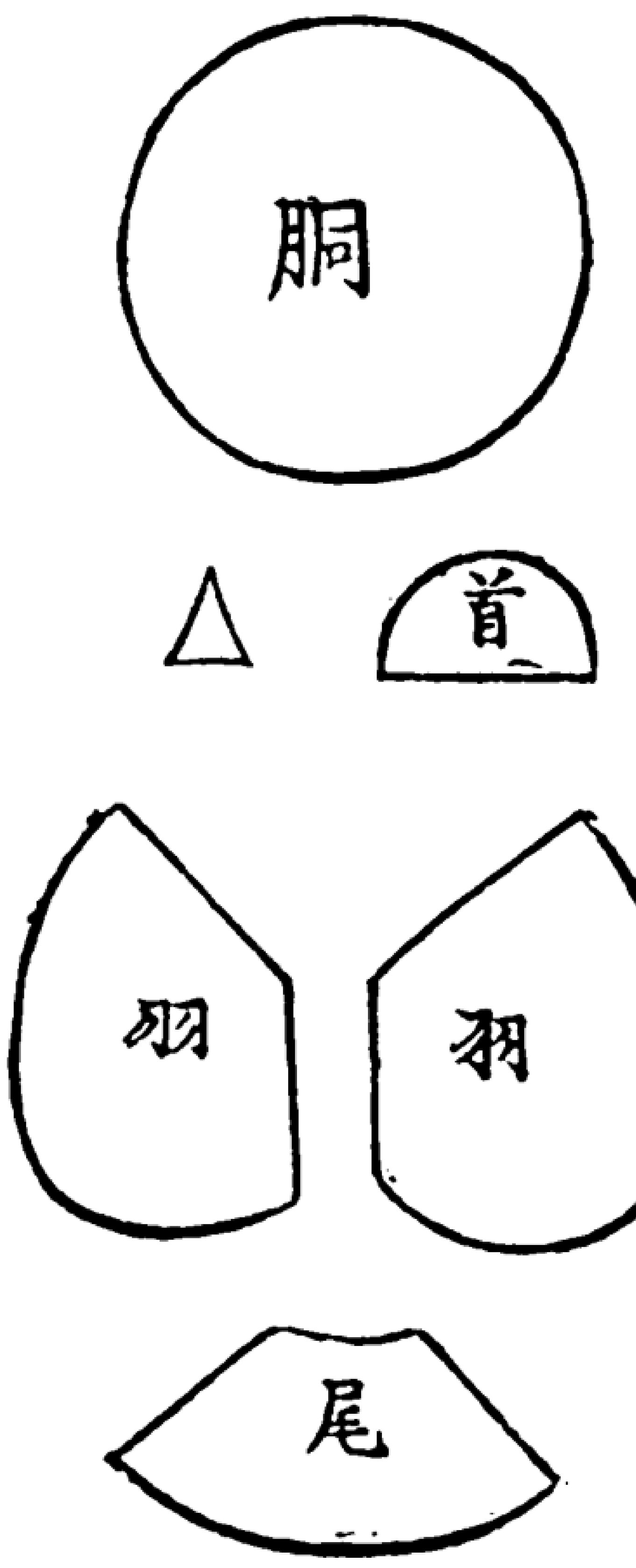
脹雀

まづ厚紙にて、前圖の如き形をたち置き、また外の厚紙もて上の形に合せ少しく大きめに後圖の如く別々に裁つべし。

前圖



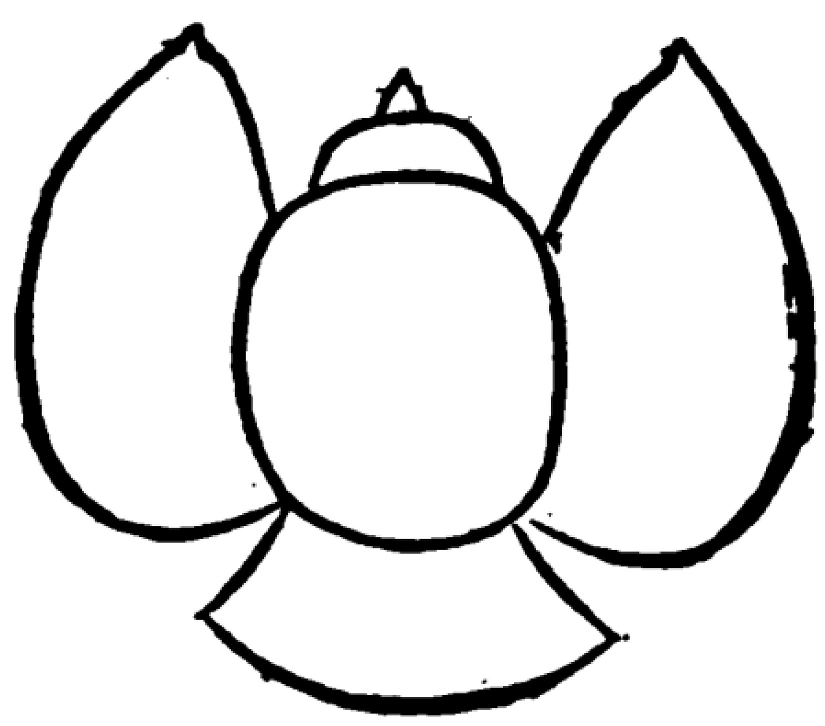
後圖



さて、その細かく裁ちたる紙に、綿を少しばかりづゝ入れ、切を各その上にかぶせて、裏にてはりつけ、口ばしを少し出して、首の裏にはりつけ、さて首、兩羽、尾等をよきやうにれき、どうの

裏がはにはりつけ、その裏に前圖の厚紙をはりつけ、背負守りとなす。但し、羽と胴と色をかへる事必要なり。切はちりめん、唐ちりめんかのこ何にてもよろし。

仕立上り



だいどころ

こくせう麺

先づ素麺をゆで、水にて能く洗ひ、昆布の煮汁をとり置、白味噌をすりて、前の煮汁にて少しこき方に仕かけ、沸騰ちたる時、飯のとり湯を投じ、どろりとなる程に加減すべし。飯のとり湯なき時は、わらび粉、米利堅粉、抔用ゐるもよし。右出來上りたれば椀に盛、汁をたつぷりかけて香料を添て用ゐるべし。

胡麻豆腐

白胡麻を能く洗ひ、日にかわかし、擂鉢にて擂り、皮を水にてながし、また能すり、木綿袋にて水漉になし、葛粉を合せ、角なる器にいれて蒸籠にて蒸し、水につけ置なり、分量は胡麻三合に葛六合の割にすべし。

筍飯

竹の子を湯煮し、やはらかきところを薄くきり、醤油、昆布の煮汁、砂糖等にて能程に鹽梅し、飯の出來たる時能かき交せ用ゐるべし。

摘み麩煮物

生麩を能程につみ、松露、筍、きくらげ、ぎんなん抔交せて、胡麻油にてあげ、砂糖食鹽にて味をつけ、丼抔に盛り用ゐてよろし。

學園

秀歌集（四十四）

○　　　　鹽井正男

思ひ出づる折りたく柴のゆふ煙
　むせぶもうれし忘れがたみに

○これは、後鳥羽上皇の御製にて、新古今集の哀傷歌の部にあり。かねて深く思ひかたらひ給ひける御方に別れさせたまへるおん悲しみを、ぬれてしぐれのといふ歌によみて、前大僧正慈圓の許へおくりたまひしが、其のつぎの年の十月また、其のなくなりたる御方の事を思ひ出でられて、無常の歌あまたよみて慈圓の許へつかはしたまひしが、其の中の一首なり。○思ひ出づる折りたく柴。思ひ出づる折りふし、たく柴といひかけたまへるなり。やがて、折りて焚く柴の折りに思ひ出づる折りふしの折りをいひかけたまへるなり。思ひ出づるとは、即ち、亡き人を思ひ出づるなり。○ゆふ煙り。折りてたく柴の夕ぐれの煙なり、○むせぶ。煙りにむせぶことなり。むせぶとは、すべて、つかへとゞこほる心にいふ、煙りにむせぶ食ひ物にむせぶ、涙にむせぶ、水が岩にむせぶ、風が松にむせぶなどいふにて知るべし。煙りにむせぶとは、煙りに呼吸のつかへとゞこほることなり。○忘れがたみに、煙りとなりし人の形見と思へるといふ意なり。忘れがたみとは忘れぬ形見といふことなり。たかみとは難みといふ意を、形見（かたみ）にいひかけたる詞にて、忘れ難き形見といふ意に用ゐるなり、古今集に「あかでこそ思はむ中ははなれなめそをだに後の忘れがたみに」などいふを見て知るべし。

○一首の意は、亡き人を思ひ出づる折りから、折り

たく柴の夕ぐれの煙りに喉のつかへてむせぶのも、なか〳〵にうれしき心地す、如何となれど、煙りとなりし人なれど、煙りは亡き人の形見なれど折りたく柴の煙りも　其の亡き人の形見なりと思へど煙にむせぶのもうれしいといふ意なり。意匠も調もあはれにおもしろき歌といふべし。

此の御歌にかへして、その大僧正のよめる歌は「思ひ出づる折りたく柴ときくからに亂れ知られぬ夕けぶりかな」にて、全集に、御製のつぎにのれり。其の歌の意は、思ひ出でたまふ折りから、折りたく柴ときゝます故に、定めて其の亂れは限り知られぬ夕煙りであると思ひますといふことにて、下の句は、亂れの限り知られぬ夕けぶりといひて煙りの亂れにこめて、御心の亂れの限り知られぬおん事ならむと思ひ忍び奉る意をべたるなり。

○

忘れじとちぎりて出でし面影は
　見ゆらむものをふるさとの月

○これも全集の羈旅の歌の部にありて、後京極攝政良經公の歌なり。○忘れじと。別れても互ひに忘れはせじといふ意なり。○ちぎりて、約束してといふ事なり。○見ゆらむものを。見ゆるであらうものなるにといふことにて、さるに、故鄕の人は忘れてか、何のたよりもなしといふ意をあましたる詞づかひなり。○ふる里の月、ふる里の月にといふことにて、見ゆらむものをの上におきて見るべきなり。○一首の意は、別れても決して忘れはせじと互ひに約束して出で立ちたる時の面影は、今も故鄕の月には思ひうかむれもせんものを、故鄕の人はわが事を、其の約束に反きて忘れてしまつたか、何んのたよりもなしといふ意にて、これもよみくち誠にあはれにおもしろき歌ならずや。

○

昔思ふくさのいほりの夜の雨に

涙な添へそ山ほとゝぎす

○これも、全集の夏歌の巻にあり。定家卿の父なる俊成卿のよめるなり。○昔思ふ草の庵の夜の雨。白樂天の詩の句なる廬山夜雨草庵中といへる心ばへを取り來たれるにて、草庵の夜雨に昔を思ひ出で、もの思ひに沈めるけしきなり。

○一首の意は、草庵の夜雨、いとゞ昔を思ひ出でてさらぬだにしめりがちなるに、山時鳥よ、あはれなる聲に鳴きて、我が物思ひにしめりたる心を、一層かなしく思はしめて涙をそへしむるな泣かせるなといふ意にて、おのづから涙こぼるゝやうにればゆる歌なり。

○

津の國の難波の春は夢なれや

あしのかれ葉に風わたるなり。

○これは、西行法師の歌なり。○津の國。攝津なり。○難波　攝津の地名、浪速(なみはや)といふ意より來たれる名なり。今の大阪あたりなり。○夢なれや。夢であるよといふことなり。夢なりといふに、感動詞のやを添へたるなり。千葉集に「あら磯のいはにくだくる波なれやつれなき人にかくる心は」新古今集なる「雨ふれど田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて」などいへるなれや　あれやと仝じ詞づかひなり。疑へるにあらず、深く嘆息したる詞なり。

○一首の意は、津の國の難波の春は夢であるワイ。今は淋しく、あしの枯れ葉に風のふきわたるといふ意にて、表は難波の春のあとかたもなくうちすぎて、淋しきけしきにかはれるをよめるなれど、裏には、世の中の事は皆斯の如く夢なりといふ浮世の心をよめるなり。うちあぐるよりやがて感動ふかく、裏の心を思へど、一しほ感深くはあはれなる歌といふべし。

○

さびしさは其の色としもなかりけり

まき立つ山の秋の夕ぐれ

〇これは全集にあり。寂蓮法師のよめるなり。〇其の色としもなかりけり。どの色としもなかりけりといふやうなる心にて、其のけしきがさびしいと、一つ取り出してさしていふべきさびしさにあらぬなり。何んとなくすべてさびしきこゝろもちなり。〇まき立つ山。まきの茂れる山の意なり。〇一首の意は明けし。いはず。誠にさびしさうかべる歌のさまなり。

〇

春しあれど今年も花は咲きにけり
　ちるををしみし人はいづらは

〇これは鴨の長明の歌なり。父のみまかりてのあくる年に、花を見てよめるなり。〇春しあれど、春ある、故にといふ意にて、しは詞をつよめむ助詞にて異なる意なし。〇咲きにけり。咲いたワイと感ぜる心なり。〇ちるををしみし人。去年、其の花の散るを惜しみたる人といふことにて、去年の春まではありたる父のことをいへるなり。〇いづらは。いづらといふ詞をいづれとかいづことといふ意にて、いづらはとこゝにいへるは、いづくにあるぞといふ意なり。〇一首の意は、春ある故に、今年もまた花は咲いたワイ。去年其の花のちるを惜しみたる父はいづくにおはすぞいづくに行きたまへるぞ、花につけて去年までありたる父のなきをかなしみよめるにて、これも、誠に感ふかき歌といふべし。

源氏物語講義（第廿五）

下田義天類

月は入りがたの空きよう澄みわたれるに、風いと涼しく吹きて、草村の虫の聲々もよほし顔なるも、いとたちはなれにくき草のもとなり。

すゞ虫のこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな。

えものりやらず。

いとゞしく虫の音しげきあさぢふに露おきそふる雲のうへびとかごとも聞えつべくなむ、といはせ給ふ。をかしき御れくりものなど、あるべきをりにもあらねむ、たゞ彼の御形見にとて、かゝるやうもやと殘し給へりける。御裝束ひとくだり、御くしあげの調度めく物添へ給ふ。

此の一條は、前段にありし二條の里亭にて、母北の方と、内勅傳靭負の命婦との面會の終を修飾したる文なり。評釋に『前段いそぎまゐるとありし所にて、命婦は立ちて歸りしなり。こゝの事共は、其の歸りざまの事を言ひて餘情を思はしめたる筆法なり』と云へるは、讀者に對して善き注意を與へたる評語といふべし。此の物語に景色を書き添へたる所は、大方此の筆法なり。讀者に對して得も言ひ難きあぢはひを感ぜしむるは此の修飾文にあることなれむ、能く〳〵心を潜めて讀み試むべし。

○月は入がたの空きよう澄みわたれるに、前に、夕月夜のをかしき程に出したてさせ給ふとありし所の照應なり。命婦が今立出でむとするに、恰も十日あまりの片われの月は、入り方の空にかゝりて、其の皓々たる月のかげがいづくともなく澄わたれる、其の上にといふ義なり。○わたれるは、ある都べての物へ普く行きわたれる意味を持てる詞なり。○わたれるにのには其の上にの義なり。○風いと涼しく吹きて。とは前條の月は入り方の空きようすみわたれるに、其の上に、蕭寂たる秋風身に染みじみとせまり來てなり。

○草村の虫の聲々もよほしがほなるも。　催し顔とは、人の涙を催し顔なるなり。前條に云へるごとく、滿目の風物いづれも腸を斷つ種ならぬはなきに、かてゝ加へて草村になく數多の虫の聲々までが、人の涙をそゝがせやうと催促がましく啼きすさびて居るさへもといふ程の意なり。

○いと立離にくき草のもとなり。　草のもととは、前

に蓬生といひ、また草も高くなりなどありし縁にてかくいへるなり。やはり此の二條の里亭をさしたるなり。立離れ憎きは、此のあはれなる風情に引れて、立離れ憎きよしなり。

○すゞむしの聲のかぎりをつくしてもながき夜あかずふる涙かな。

これは命婦が右の風情に感慨やるかたなくて、ひとりごとのやうに詠み出したる歌也。○すゞむしのは、今此の草村の中に啼きつゞけて居るすゞむしのやうになり。のはの如くの義なり。○こゑのかぎりをつくしてもとは、啼聲の我が身にあらむかぎりを出し盡してもなり。實は限りなく啼きかなしむを強くいひたる詞にて、詞をかへていへば、いつまでなきつづけてもといふ程の意なり。○長き夜飽かずふる涙哉とは、秋の長夜を啼き明しても、これでたりた充分だといふことのなきまで、こぼれ落る涙かなアと云ふ程の義なり。ふる涙は、雨の如くふる涙にて、すずむしの縁にふるといひたるものなり。

○えものりやらず。　前の歌と此の詞との間へ『と詠み出して、何立出で兼てといふ語を補ひて見るべし。すゞむしの如く聲の限を盡して啼きても、長き夜飽かずふる涙かなアと詠み出して、何立出がてに車にもえも乘りやらずためらひ居たりとなり。

○いとゞしく虫の音しげきあさぢふに露おきそふる雲のうへ人

これは命婦の立離れ憎くさうにして、右の歌を吟じたるを聞きて、母北の方がそのかへしともなく御答したる歌なり。○いとゞしくとは、一層といふ程の詞なり。此の句は二三の兩句を隔てゝ、四の句の露置きそふるとある所へかゝる詞なり。○虫の音しげきあさぢふとは、今宵の實景を借り來りて此の程愁傷の淵に沈める二條の里亭をかくたとへたるものなり。虫のねは人の啼くねにて、露は涙によせたるなり。雲のうへ人は命婦をさしたるなり。命婦を雲の

上人といひたるは、露おきそふるといへる縁によりて雲の上といふ語を匂はせたる所なり。露はその質霧などの如く、空よりふりくるものには非らねど、俗にも夜露が降るなどいへど、大らかに空よりふりくるものとして雲の上といふ語を縁にとりたるもの也。さて此の雲の上人といふ體言留は、その下にかなどいふ語を補ひてみる事定まれる格なり。こゝもしか補ひて心得べし。一首の心はさらぬだに虫の音しげきあさぢふに、いとゞしく露おきそふる雲の上人かなといふ義なり。

○かことも聞えつへくなむ。とは、かこつけごとをも申したきやうに存じますと也。○かこつけごとゝは、さらぬだに虫の音しげき淺茅生に、いとゞ涙をさへ添へたまへるが故に、此の淺茅生のなげきは、御使の御しわざなりとのかこつけごとを申したきやうに思ふと也。

○といはせ給ふ。とは、右の歌をこしもとして言はせ給ひし由なり。此の語によりて命婦は既に席を立ち母北の方は奥に入りて啼き臥したるさまなることを思ひやるべし。

さて此の一條を例の評釋に評して曰はく『こゝの月は入り方の空きよく云ゝといへる所は、上に夕月夜のをかしき程にといひ、月影ばかりぞと云ひたる脈絡なる事は、諸註に云はれたるがごとし。但し月のみならず、風のことも亦同じ脈にて、野分だちてといひ、野分にいとゞあれたる心地してと云ひ、さて、こゝに風いと涼しくと云へる荒かりし風漸々吹き鎮りて、月影の涼しく澄みたるさま、響きあひてえも云はれぬけしきなり。草村とあるも前に草も高くなり。といひ、八重葎、蓬生など云へる脈が、こゝに至りて虫の聲を添出して、次の歌の種としたる、心をつけて見るべし』といへり。これ文章の照應なり、其の脈絡の始終一貫せる所に目を注ぐへし。以上は、原文の儘にて、讀見る時は、其の餘韻瀏々

として言外に滴る如き思ひ有る所なれ共、余の如き拙劣なる筆を持ちて註釋しては、其の言外の風情と云ふ邊は、所詮寫し取る能はざる所なれど、今は唯其の文章の上に顯れたる一面をのみ解釋したり。讀者此の註解に依り、大體を心得給はゞ、立戻り原文を熟讀して、其の言ひ難き趣味の存する所を自得し給へかし。

○をかしき御おくりものなどあるべき折にもあらねど

をかしき御おくりものとは、風雅なる引手物なり。北方より御使への御挨拶にとて、命婦へ引手物がありし也。いつもなれど、をかしき御おくりもの即風雅なる引手物など奉らるべき所なれども、今日のおくりものには、さるをかしきものなど奉らるべき時機にあらざれど也。

○たゞ彼の御形見にとてかゝるやうもやと殘し給へりける。彼の御形見とは、御息所の御形見なり。にとてはにせんといひてなり。○かゝるやうもやは。かねてかゝる折もやあらむの略語なり。彼の御息所の御形見として、御使などのありし時に參らせむ品なりといひて、兼ねてより今日まで仕舞おかれたる品のなり。

○御裝束ひとくだり、御ぐしあげのてうどめく物そへ給ふ。即御息所の御裝束一領に、御髮上の調度らしき物を添へて贈られしなり。御髮上の調度めくものとは釵、鈿などの類にて、即髮道具の事なり。

さて此の贈りものゝ一條は、餘波のまた餘波にて、さしてこゝには用なき事のやうなれども、其の實はさにあらず。後々にいたりて、此の品より大波瀾を起し來りて、全篇を震撼する材料とも成るべきものなれど、その心して目をつけ置くべし。これを物がたりの種子といふ。上來說きさり說き來りて、既に一條の出來事盡きむとする時に、他の一點景を附け加へて、讀者の目の先をあらため、さてその事を

一個の導火線として、全篇の大伏線をほころばしむる法なり。芝居の脚本などに、寶物の紛失、凶行者の遺物などいでくるは、皆此の法を用ゐし所也。本書、此の贈與物は如何なる導火線となりて編中に波瀾を起すべきか。そは此の後段に於きて説明すべし。

布美安波勢（七）

白松園主人寄

五月

ともしするところ

左　　尚　文

奥山の大かひ小かひには、常磐木おほく立ちならびて、さ月のころは、もとつ葉すゑつ葉、いやさかえにさかえ、このもとのちかや〇さゝ原、いやしげりにしげり、ひるもけうとく物すさまじう、杣人のゆきゝも、たえはてゝ、いみじきけ〇ものども所えて、あまた住つくなめり。かゝるおそろしさをもいとはで、夜もすがらほぐし立、おきよりくる鹿をいんとて、弓矢たばさみひそまりをるは、いとも〱をゝしくたけき、ますらをのしわざになも有ける。

右　勝　　　保　世

そこはかとなう、しげれる葉山の峯に、夕月の影はかくれて、ほぐしのひかりあらはれぬるは、雲のたえまの星かとあやまたれけるをりしも、弓のつる音たかくなりひゞくは、霜おくと夢みし鹿〇にて、命もきえなんと、たもとうちしめりたるに、射そんじけん、すこしまどはなりしに、矢をはなせしことの口をしといふ聲の、ほのかにきこえけるに、むすばれたるおもひもとけて。

評判　左右のふみ、ともにをかしき中に、左のはいさゝかのきずながら、ふたつみつも見ゆれど、すこしおとれりとやいはまし。

左　勝　　　祝　之

なが雨、いさゝかひまあるよひにて、たれこめたりしかうしを、ひきはなちてはしゐするに、なほ雲がちなる空の、いとくらう何のあやめもなく、ものむつかしけれど、山さとのかひには、こゝかしこの高根つゞきに、ますらをがほてさして、かりありけるともしのかげのみ、ひとゝころの五月やみにもかくれずなん。

右　清　風

五月雨打つゞき、心もはれやらぬやみの夜に、をちの高ねをみわたせど、木の間〳〵に、火影のかすかに見えけるは、ともしの光になん。いきとしいけるものごとに、いもせの中わはりなきに、わきて妻こふさをしかの、秋はもみち〇になき、なつはともしの火かげによりくるは、いとも〳〵あはれになん。

評判　左の文いとめでたし。右のふみも、わろからねど、詞づかひにつたなきふしまじりて見ゆれど、まけぬべし。

左　徳

ゆふべの山の、くらうなりゆくまゝに、こゝの峯かしこのふもとより、雲間の星のやうにかり人の、松ともして岩根木のもとの、たよりよき所に、たゝずみ居たるは、ともしするなめりと思ふほどに、やがてこのひかりにうかれつゝ、こゝら鹿のはしりありくを、弓矢してかりとるは、いとも〳〵をゝしきわざとやいふべからん。

右　勝　重　豊

大ぞらの星のはやしをつくりいでたらんやうに、ともしすといふさつをらが、やまより山をつたひゆくほかげに、あはれよりくる鹿の、夜もすがらめもあはせぬや。

評判　左の文ふもとの松の火を、雲間の星のやうにといひ弓矢して鹿をいるを、いとも〳〵をゝしといへるなど、すべていかにぞや。右の文はみじかきに、よくかきえたりかちとす。



敎梯抄（續）

千載集冬

冬月の心をよめる　平實重

夜をさむみむすぶこほりの下にさへ
こゝろふかくもすめる月かげ

續後撰集雜上

後鳥羽院御製

題しらず

よをさむみ閨のふすまのさゆるにも
わらやの風をおもひこそやれ

風雅集冬

冬の歌の中に

太上天皇

さむからし民のわらやをおもふには
ふすまの中のわれもはづかし

家集

冬の歌の中に　後京極攝政

おほふべき袖こそなけれ世のなかの
まづしき民のさむき夜な〳〵

夫木集雜

百首の歌の中に　後一條關白

いつまでと夜寒のころもぬぎかけて
あはれと民をおもひしりなむ

同

毎日一首の中に　民部卿爲家

あはれなり冬の夜さむに明ぬより
　おのが世いそぐさとびとの聲

千載集冬
　題しらず　　紫式部
水とりをみづのうへとや餘處に見む
　われも浮きたる世を過しつゝ

同
崇徳院御製
　百首歌めしける時よませ給ふける
このごろのをしのうき寝ぞあはれなる
　上毛のしもよしたのこほりよ

新千載集冬
御製（後光嚴院）
　百首歌めされしついでに雪
みちしあれぞわが世もなどかしら雪の
　ふりにしあとにかへらざるべき

風雅集雑上
　後伏見院北山亭に御幸ありて人々
　歌つかふまつりける時雪を　　法印覺懐
たまほこの道ある御代にふるゆきは
　むかしのあとぞ猶のこりける

新葉集冬
　住吉の行宮にまし〳〵ける頃うへ
　のをのこども題をさぐりて歌つか
　ふまつりける序に松雪といふこと
　をよませ給ふける
後村上院御製
年さむきためしはたれもならふらむ
　まつにつもりの浦のしらゆき

同
　雜上
　兵部卿親王家百首に寄雪述懐
　といふこゝろを

民部卿光資
あつめよとをしへし人はむかしにて
いたつらにふる庭のしらゆき

延文百首冬
延文百首歌の中に雪
左大臣(經教公)
代々をふる庭のをしへのあとむかり
のこしてつもれ宿のしらゆき

古今集冬
寛平の御時きさいの宮の歌合の
うた
よみ人しらず
ゆきふりて年のくれぬるときにこそ
つひにもみぢぬ松も見えけれ

羇旅　七首

古今集離別
源のさねがつくしへいでゆあみ
むとてまかりける時に山さきに
て別れをしみける所にてよめる
しろめ
いのちだにこゝろにかなふものならば
なにか別れのかなしからまし

(以下次號)

みちのく紀行

故僧　均月

▲は補
●は誤

十日、今はとて、松しまを立ちいでけるに、名殘をしくおぼえて、

立ちかへる朝みつしほのいやましに
などりをしまの磯の旅ねも
又も來ん身はたのまれぬ松しまや
をしまのいその波にわかれて

長老坂をこえて、利府といふ所をうち過ぎ、廣瀬河をわたる。馬に水かいなどしてやすらふ。

駒とめよ野田の玉川水かはむ
　鹽風こして袂涼しも

と市といふ里を過ぎて、原の町といふ所より道を尋ねて、東照宮を拜し奉り、大崎八幡宮にまうで、申の時ばかりに、仙臺の旅店にかへりぬ。

十一日、仙臺を出でて、增田といふ里より、野道にかかり、田づらを傳ひて、笠島道祖神、實方中將のはかを尋ねみんとて、はるばると行きて、齒村にいたる。杉村の内に、鳥居たてり。三間四面ほどの拜殿、社あり。ぬかづきて、

笠しまやさして夏野の花もなき
　ことの葉草を手むけにぞつむ

さて、此の社にまうづる人、なにの祈にや、莖をつくりて、參らせたる、數しらず見え侍り、あやしくおもひ侍りて、里人に尋ねけれども、古實さだかならず。あるものにしるしたるは、此の道祖神は、京一條のほとりにはします、さいの神のむすめなりしが、みそかどの、とがによりて、父母の神に、おひやられて、此所にとゞまれる神なり。さるほどに、さね方のちう將、此の國の守にて、下られし時、此の社のまへを、高にて通られしを、里人、此の神は、物とがめし給へば高よりおり給へと申しゝかど、いかなる神にて、ましますぞととはれしに、しかじかのよしを申す。さやうのいやしき女神に、下高すべきにあらずとて、とふられしに、高たちまち、すくみ、中將も、落ちて、はかなく身まかられけるとなん。さて、かの中將の古つかをみんとて、里人をあないにたのみて行く。社の一木の杉の枝に、馬の沓、數しらずかけられたり。これなん、かの中將ののられし高の塚なりといへり。そこより、十町あまり、田面を傳ひ行きて、鹽手といふ里の、民家の、片山かけたる藪原の竹、むらむらしげりたる所に、石をつみて、そのうへに、叢祠かたばかりなる躰なり。まことに、古つかと見えて、遠き世がたり、れもひ出でゝ、いとあはれなり。

(欠文)名は、今も、もぬけし人は、せみの羽の林の竹の、世々に朽ちせぬ。こゝよりも、たけくまの松をみんとて、はる〳〵と、田のわせを傳ひ、野をわけ、里をとひて、行くほど二里あまり、やゝ、岩沼の里近く、たづね行きて、山のはなわに、ふりたる松、二木立ちたる木陰にいたりぬ。垣ゆひまはして、枝たれ、いと小だかき姫松なり。此の松は、むかし、此の國の守に下りたる人の館のほとりに、植ゑられし松なりとかや。されど、たび〳〵、枯れたりとみゆ。源重之、此の國の任に下りたる時「武くまのまつ一本は枯れにけり風にかたらふ聲のさびしさ」藤原の元善朝臣、陸奥の守にて、下りけるに、武隈の松のかれけるを見て、小松を植ゑつがせて、任はてゝ後、又、おなじ國の守になりて、さきの任にうへし松を見て「植ゑし時契りやしけんたけくまの松を二たびあひみつるかな。」其の後、橘季道、父、則光朝臣のもとに下りて、たけくまの松をよめるに「たけくまの松は二木を都人いかにととはゞみきとこたへむ。」その後のことにや、能因法師、みちのくに二たび下りて、後のたび「武くまの松もかれて、なかりければ、「武くまの松は此のたび跡もなし千年をへてや我はきつらん」それより、時よをへて、西行法師下られし時、武くまの松は、昔になりたりけれど、あとをだにみむとて、こゝに來りて「かれにける松なき宿の武くまはみきといひてもかひなからまし」其の後、又植ゑつかれしにや、觀應の頃、僧宗久下り、記に「武くまの松のかげに、旅ねして、木の間の月に、心をつくし」とかき、道興法しん王、回國の記にも、たけくまの松陰に、しばらく立寄りてなど、書き給へど、此の松の榮枯も、たび〳〵なりしにや。今のまつは、觀應より此のかたの松にや、二三百年も物ふりたるたる梢と見えたり。松ものいはゞ、とはまほしく、しばらく木陰にやすらひ侍りて、

いく度か枯れてさかふる武くまの子もたる松のちよを見すらん」はなわにたてる松も、子もたりと、萬葉

にょみ侍りしやらむ。かののうゐん法師は、みちのくに、「二たび下られしよし、見え侍れど、老の身は、是や名殘ならんと、おぼえて、

ふりにける我も六十にたけくまの
二木の松をふたゝびやみん

けふの日も、山端にかたふきけれど、岩ぬまの里とひ行く十町むかり行きて、明神の神木とて、こゝにも、武くまの松といふあり。本は一木にて、二またの松有り。六七十年の物と見えぬ。明神に詣す。額には、稲荷大明神と有り。所には、竹駒明神と申す。子細、人語りしけれど、くだくだしけれど、もらしつ。けふは、岩沼にとまる。

十二日、友とせしひとびと、こゝより、相馬の道にかかり、水戸領をさして、筑波山、鹿島大社に詣でんわらましなり。予は、そのかみ、かしこにも、行脚し侍り、そのうへ、二本松の好士に、歸路を契りしかど、わりなく、こゝよりわかれぬ。ともなひし人「もろともにしばりしだにも、うき袖を、ひとり行くらん旅をしぞおもふ」と袖をひかへて、いひければ、返しに、

旅衣なれこし人に立ちわかれまづ袖しばるみち柴の露」

さき立ちて馬にまかせて出でぬれど、そなたにのみ心ひかれて、いとわびし。もとこし道なれど、こゝかしこ、おもひ出でつゝ、さし行く程に、藤田といふ所にとまる。夕ぐれの月、軒端よりさし入るをながめて、

わかれきてかたしく草のさむしろに
かはらぬ友と月のみぞおもふ

ひとりさしむかひても、なぐさむかたなけれど、うちふしぬ。

十三日、忍ぶ山をわかずみつゝ、かのもぢずりの石を歸さに尋ねみんと友といひしことなど、おもひ出でゝ、ひとりこぢぬ。

わかれつる友を忍ぶのたびごろも
露のやつれもかぎりしられず

此の里より、道のあないをとひ、東の山もとをさしゆく。六七町ほど行きて、渡し舟をこえて尋ねしかど、こゝより、十四五町ほどありといへり。野里をはるゞると、分け行くほど、夏野の薄の、風になびきたるも、いと涼し。

　秋もまたしのふが原のしの薄
　　ほに出ぬかせになびく涼しさ

行きゝゝて、山陰にいたる。先、觀音堂を拜しぬ。その別のすこしくばかなる所に、棚ゆひまはしたるうちに有る六七尺に、四尺ぞかりにみゆる石の、面は土にうづもれて、うしろのかた、上にあらはれたり。柵の前に、しるしの石たてり。

陸奥國信夫郡毛知須利石
元祿九年夏五月福島大守紀　正虎　表之

尋ねきて見れぞくちせぬ石にのみ
　遠きむかしを忍ぶもぢずり

夕陽のころ、二本松、隱士資有かもとにかへりつきぬ。

十四日、空くもりたれど、資有を友なひて、あだちがはらを見に行く。二本松より、北東にあたりて、岸よりほどなく、一むらの林のうちに、觀音堂在有り。密院なりとかや。堂のかたはらに、大磐石十四五かさなりて、その下石のはざまをくゞりてこなたかなたに、ぬけかよふ所など有り。塚のめぐり、百歩ほど有るなるべし。俗には、鬼の住みし塚なりと、あやしきことを語り傳ふる類にや。拾遺しふには、みちのくに、名取の郡、くろつかといふ所、重之がいもうと、あまた有りと聞きて、兼盛よみて、つかはしける歌に陸奥のあだちが原の黒つかにおにこもれりといふはまことか。」此のおにとよみしは、重之が妹の事をいへり。なりひらの歌にも「かりにもおにのすたくなりけり」と、女のあまたつどへる事をよめり。此の塚、上古より有るゆへに、黒つかと、所の名にいひしと見えたり。今は、大ひらとかや、里の名をいふにや。其の塚のかた

はらに、まゆみの木も侍りし。すべて、此の所を、あだちが原といふと見えたり。しばらく、休らひてかへりぬ。

　をもへたゞあだちがはらもよそならず
　　たれも心の鬼こもる身を

　そことしもあだちがはらはしらま弓
　　こゝろひかれし黒塚もみつ

十六日、二三の好士、旅宿にとぶらひ來りて、何くれと物がたりのつゐで、としごろせちに、望みしかど、かゝる折にとて、詠歌大概のはし〳〵を、よみなどしてくらしぬ。

十七日、木元廣一が方にまねかれて行く。此のころ、廣一主殿にて、家督相續せしよしを聞きければ、ことぶきて、

　いくよとはいざしらま弓ものゝふの
　　とり傳へ行く家はさかへむ

十八日、此の間、旅のつかれをも、やすめ侍りしかど、あすはむさしの草庵に歸るべきあらましなれど、みなみな、しゐてとゞめけれども、わかれをのべて、再會をちぎる。資有が餞別のかへしに、

　なごりをもふこゝろぞとまるあはれ世は
　　あだちかはらの露のまくらに

十九日、あるじの男、もと宮といふ所まで、おくりきてわかる。此の道に、心ざしふかきものにて、秋は、むさしの國に、のぼり侍らんといひければ、二本松といふことを、立入れて、扇に書きてやりぬ。

　まつことにして又もあひみん
　　こぬ秋はその杉ならぬ二本の

あさか山は、さすがに名殘おしくすぎがてに侍りしかど、馬をとゞめて、やすらひぬ。

　衣手の淺香のぬまのかげ涼し
　　結びてゆかむ山の井の水

ふくしまより、こなたの里々にて、こかひするを見て、

　夏引のいとなむしづがひまやなき

いぶせきいはにまゆごもりして

をしが池といふは、鳥も見えねど、

夏かりの蘆ふみしだきいづこにか
妻どひゆきし鴛がいけ水

すか川といふ所にとまる。

廿日、矢ふきといふ里にて、秋田の城主、旅行のいかめしきよそほひを見る。足がるのおとこ弓やりなど、あまた持ちつゞきたり。此の里を道興法親王の記には、矢つきの里とよみ給へど、ふるき名によりて、

ものゝふの矢つゝきの里も名にぞきく
おさまれるよはゆぶくろにして

白坂の里にとまる。

郭公數聲鳴きけれど、

かへるさは友もなしとや草まくら
あはれことゝふ山ほとゝぎす

廿一日、さかひの明神のこなた、山中といふ里(……)うぐひすをきゝて、

春か夏かおぼつかなしや山中の
しげみに今もうぐひすの鳴く

なすのゝはらを過ぎて、さく山といふ所にかゝる。道すがら、夏草の花咲きまじりたるを見て、

わけ行けどさゆりなでしこさく山の
秋をもまたぬ花はむつまし

きつれ川といふ所にとまる。里の入口に、大きなる河有り。此の川の名なるべし。

いざしらぬ里とひてこそきつれ川
なみのまくらをこよひかさなん

廿二日、あくつ川といふ所より。舟にて下る。此の川は、水上日光山より出でゝ、すべて、きぬ川といへり。

日をわたるたびのうき瀬にあくつ川
けふより舟の道かへてゆけ

だみたる物いひも、いとにくし。

舟人のあらき心をとりかぢに
はや瀬の波も身をくだくらし

久保田といふ所にとまる。
廿三日、ひとつ木、もろ川といふ所より、東に、大きなる池有り。人に尋ねけれど、山川といへり。

　夏草のしげる野澤を川山の
　　池とはいかに人のいふらん

二連、關宿、蓮沼などいふ所を過ぎて、かすかべといふ里、(欠)………(にとまるカ)

　うきたびも(欠)………ぬる
　　草のまくらをかすかべの里

廿四日、朝立ちいづるとて、

あはれ人すみはてぬより立ちかへる
　　草のいほりもたびの外(欠)…(かれカ)

釣月草

享保二年季夏　念日

(完)



浮世いかだ舟

作者不詳

●蛙の願だての事

今はむかし、池のほとりに蛙數多あつまりていふやう、あはれ生きとしいけるもの丶中に、人はどうら山しきものはなし。われらいかなれどかゝる生をうけて、手足をそなへながら、水をれよぐを能として、陸に上りてはつくどひ居り、行くときも意のまゝに走りゆくことかなはず、たゞ遍々と飛ぶどかりにて、はやわざもならず、いかにもして人のごとく立て行くならどよかるべし。いざや觀音に願をかけて、たつ事をいのらんとて、觀音堂に參りて、願はくはわれらをあはれみ玉へ。せめてかゝる身なりとも、人のごとくに立ち行くやうに守らせ給へといのりける。まことの心ざしをあはれと思召けん、そのまゝ後足にて立ちあがりけり。

所願成就したりとよろこびて、さらば連れ立ちて歩き
てみんとて、うしろ足にて立てば、目うしろになりて、
一足も向ふへゆかれず、前もみえねばあぶなさいふば
かりなし。これにて、何の用にもたゝず、たゞもとの
ごとくなし給はれと祈りなほし侍りといへり。浮世坊
聞きて、世間の人これに似たる事おほし。とかく身の
ほどを知らざるゆゑに、君をうらみ世をかこつもの皆
かくのごとし。蛙はおのれ鳥獸にあらず。虫のたぐひ
にして、人をうらやみ立ちてゆかんとすれ共、生れつ
き人に似ず、目のつきどころのあしければ、立ちて行
くべき物にあらずと、身の程をしらざるゆゑ也。倅侍
も、是ほど奉公すれども、知行の加增もなく、物がし
らにもなされず、おもしろげもないと述懐してよの
家中へ行きたらば、立身せいではなど思ひて、無理に
隙をもぎとり、外をかせげどもありつきかねてめいわ
くする時はたゞもとの家がましぢやものをとくやむこ
と、千たび百たびなれ共かひなしそのうへ、古語にい
へることあり、孝をつくして、親その孝を孝とせざる
は、いまだ孝のいたらずと知るべしといへり。それに
おのれが分際に過て、知行をば多く欲がり、奉公をば
おこたり、何しいだしたる手柄も德もなく、藝もなき
ものすゑをわきまへず、あたりまなこに萬事を思ひた
ち、臍を噬むくやみをいたす輩みなかへるの願だてな
り。人はたゞ足ることをしるべし。足る事を知るとき
は、たのしみあり。貪ることおほきものは、うれへあり。
足ることをしりて、常にたれりとすれば、身を終るま
で辱しめられず。貪をとゞめて、常にたのしめば、身
を終るまでうれへなし。人をうらやむは足ることをし
らざるなり。貪る事は欲ふかき所也。古歌にいはく、

世の中のかみをみるにはかぎりなし
　　われよりしもの人もこそあれ

それ君子は、たからを愛すれども、是をとるに道あり。
君子は道をうれへて、まづしきをうれへず。人に百歳
の壽をたもつものなし。然るをまげて千年のたくはへ

を思ふ。是まことに愚なるにあらずや。福をもつて子孫につたへんとすれど、必むさぼる色あらはれやすく。へつらひおこりて、耻をかうぶり、かへつて禍おこり、子孫に及ぶことこれあり。日夜つねに忠と孝との二つによりて、是を思ふ事わすれざれど、たとひ人しらずといへども、天かならずこれをしろしめす。陰徳あれど陽報ありとは、此事をいふなり。いかでか天道のめぐみなからん。妻子を愛する心をもつて、親につかふる時は、其孝行ねんごろにしてつくすべし。寳をもとむるはかりごとをもつて君につかうまつる時は、ゆくもかへるも忠あらずといふことあるべからず。（未完）

口腔攝生法

鶯溪居士

夫れ口腔は、言語發聲の門にして、食物咀嚼嚥下を司どり、酸素を吸納し、炭酸を呼出する道路にして、生活上最大要處なり。故に、一朝口內粘膜或は齒牙の疾病に罹り、腐爛汚壞するときは、此臭氣を肺臟中に吸入して、血液之が爲めに不良を來し、又た病的分泌物の浸染したる食物、幷に唾液等を胃に送下して、胃粘膜の刺戟物と成り、遂に全身に碍害を及ぼし、救ふ可らざる不幸を招くに至ることあるものなれど、常に口內を保護して、健全ならしむるは、養生の第一要務なりとす。諺に、口は百病の入門といへり、實に衞生は、口を以て最も愼むべき者とするなり。斯に於て口腔攝生法を述ぶるに當り、先づ口腔諸機關の大体を揭げて以て解論せんとす。抑も、口の表相は、顏面の下位に在て、口輪匠筋を以て排成せられ、上方に在るものを上唇と云ひ、下方に在るものを下唇と名く。上下兩唇を閉合する中央部を口裂と云ふ。其結合兩部を、口角と稱す。而して口腔內面は、總て粘膜を以て被覆せられ。上下顎骨の齒槽部に、齒牙を併植せり。最初に齒牙を發生するに當て、上下兩顎に二個を生じ、漸

次萌生して、各十個宛を限りて、止む。其質有機質に富むを以て脆弱なり。之を乳齒と云ふ。此齒は、生後五六ヶ月より發生して、十四五歳頃迄の間食物を細碎する用に供す。此の齒牙は成人齒と異なり、一般小形にして、吸收作用に由り、遂に脱落するものなり。之に換りて永久齒を發生す。之を成人齒と稱し、生後六年頃より發生して、其數各顎十六個宛を有し、高老に至るまで、咀嚼作用を營むものなり、是の齒牙を區別すれば、前齒四枚、犬齒二枚、小臼齒四枚、大臼齒六枚より成る。其質多量の無機質を含有するを以て、硬固堅牢なり。其形狀乳齒より遙に大なり。又舌は、舌骨より起り、前方に走り、長楕圓形にして、隨意筋質より成る。其尖端は、遊離して門齒部に至る。其作用は、味覺、觸覺を司り、言語を調節する緊要なる器關なり。其上内方の中央部に懸雍垂ありて、其兩側には、前口蓋弓、後口蓋弓ありて、其間に扁桃腺を存在す。而して口腔に分泌する液に二種あり。一は口腔粘膜を濕潤し、保護作用を司る粘液にして、一は消化及嚥下作用を補助する、唾液是なり。

上述する口腔機關の大要は斯の如し。次て口腔攝生に就き、次第を追て述ぶべし。

第一小兒出生後、五六ヶ月に至れば、始めて齒牙萌生を營む。先づ齒槽縁を吸攝して、齒牙成熟の地を與へ、齒根發生して、愈々增大するに從ひ、齦肉是れに壓せられ、漸々菲薄となり、終に齒牙の萌生を見る、而して其萌生の順序は、下顎齒に於ては、上顎齒より、凡そ二三ヶ月早く發生す。則ち中前齒は、五ヶ月より八ヶ月に到る間に生じ、側前齒は、七ヶ月より十ヶ月に至る間。犬齒は、十二ヶ月より十六ヶ月の間。第一臼齒は、十四ヶ月より二十ヶ月の間。第二臼齒は、二十ヶ月より三十六ヶ月の間に追次發生するものとす。此時に當て、唾液增泌して、口内に爽涼を覺ゆるを常とす。而して齒牙發生時に於て、一の作用刺戟となり、全身に障害を發起する

ことあり。就中腦症を誘起し、危險に陷らしむることあり。此際は直に醫に就き診斷を受くべし。

第二　小兒六七歳に至れば、齒牙交換す、之を齠齔期(齒カハル時期)と云ふ。六七歳より、十四歳頃迄は、父母たるもの、深く注意すへき期にして、時々其兒の齒數を檢し、上下共に十枚を備ふれば、乳齒の發生完結せりと知るべし。此時に於て、齒牙排列不整に陷り易きものなれば、專門の醫師に就き、毎歳一二回以上の診斷を受るを要す。

第三　小兒六七歳にして、十齒以上を備ふる者は、既に成齒發生せし者にして、此齒を六歳臼齒と名け、乳齒の后部に發生したるものは、永久交換せざるを以て、殊に注意せざる可からず。

第四　牛乳を用ひて、哺育する小兒は、哺乳後に於て、水に浸したる布片を以て、齒牙を拭淨すべし。然らざれば、齒間、或は口腔壁に附着せし牛乳の分解して、齲齒の病源となればなり。

第五　牛乳哺育の小兒に、吸飲物を與ふる時は、空罎を強く吸引する爲め、前齒を唇外に突出せしむることあり。乳母たる者深く注意を要す。

第六　乳齒を猥りに拔去し、其適當時期を誤る時は、亂排症に陷り、顏貌を惡醜ならしめ、且つ音聲に障害を來す等、大なる影響を及ぼすを以て、殊に注意せずんばあるべからず。

第七　小兒に食物を與ふる時は、務めて咀嚼することを敎へ、必ず輕卒に嚥下することを戒むべし。殊に食後は、必ず微温湯を以て含嗽せしめ、齒間に附着する食塊を排除せしむべきものなり。

第八　齒牙は、有機、無機、兩質を以て形成せるものなれば、稀薄酸類と雖ども、容易に齒牙組織を犯すものなれば、小兒は殊に酸性のものを避くべし。然ども或場合に於て用ゐるときは、直に少量の重曹水を以て含嗽せしむ。然るときは酸類と中和して無害となる。若し重曹缺乏のときは、食鹽水にても可な

り。

第九　春期發動期（十五六歳より十八九歳迄）に到れば、最も多く齲齒を發生し、齒牙疼痛を起し、食物咀嚼の艱難を感ずる者なり。尚ほ之を放置するときは、漸々に齒質壞崩し、生涯其本能を失ふに至るのみならず、又往往齒膜炎を起して、之れが病源と成り、遂に腐骨疽に陷り、天然の形體を損し、顏貌慘然たる人とならしむるものなれば、其發生初期、則ち齒牙に小窩胴を生ぜし際に於ては、速に專門の醫師に托し、治療を乞はざる可からず。

第十　丁年に至れば、俗に親知らず齒と稱する智齒、各顎に二個宛發生す。上顎は、智齒發生の部位廣濶なるが爲めに、障害少く發生すれども、下顎は是れに反し、第二大臼齒と下顎枝との空間狹少なるが故に、近傍組織に刺戟を與へ、焮衝腫脹を起し、疼痛甚だしく、咀嚼作用不完全となり、嚥下困難を來し、時として牙間緊急を發することあり。之れ等は醫に非らざれば治すること能はずと雖ども、劇痛に堪へざるときは、睫眉の急を救はんが爲め、頬部に冷罨法を施し、鹽酸加里八、〇。水五〇〇、〇の溶液にて屢々含嗽すれば輕快を覺ゆることあり。

第十一　口内粘膜病に罹り、或は熱性病に冒され、又は飲酒後直ちに、就褥するときは、口内分泌液、分解して酸性となり、齒牙の土質分を溶解し、遂に齒冠を崩潰するに至る。此場合に於ては、亞爾加里性溶液にて含嗽し、以て豫防の路を採るべし。

第十二　口内含嗽の必用は、前に記述するが如し。然れども其場合を誤り、且つ含喇せんと欲するもの、清汚を確認せずして、之を行ふときは、悔いても歸らざる禍を招くことあり。愼まずんばあるべからず。余毎に普通湯屋に於て、入浴中の人、偶々其浴湯を以て、口内を洗ふを目撃することあり。蓋し浴湯の不潔なるは言を俟たず。甚しきは梅毒、癩病、淋毒、其他種々なる黴菌、其内に含有せん。是を以て口内

を洗滌したらんには、或は其黴菌の、粘膜より傳り、體內に浸入し之が爲に病を起す。實に恐るべき至りならずや。

第十三　齒石(齒鹽)は、口內に分泌する唾液、沈澱附着物にして、齒頸周圍部より、齒冠中央部に多く沈着し、齒牙に汚色を呈はし、外觀の美貌を失ふのみならず、惡臭を發し、其他種々なる病源となり、就中軟組織に刺戟障害を與へ、遂に齒牙搖動し、脫落することあり。故に齒石堆積するときは、速に術を加へ、常に齒面を清淨滑澤ならしむるは齒牙保存上欠く可からざる者とす。

第十四　齒磨粉を使用する目的たる、齒面に粘着せる汚物を除去し、齒牙表裏面を滑澤清潔ならしむるに在り。故に齒磨粉は、極めて細微の粉末にして、容易に津唾に溶解し、齒牙及口粘膜に障害せざる性質の物を撰ばざる可からず。然るに世人其良否を撰ばず、齒牙の消耗を來す可き性質の齒磨粉を慣用して、毫も意とせず、是れ大なる誤なり。齒磨粉は、齒面に附着せる汚物を除き、酸液を中和せしむるを以て目的とす。余多年經驗の上、最も的切なる齒磨粉を案出せり。其處方

沈降性炭酸石灰	四百五十瓦
藥用石鹼	一、〇
重炭酸曹達	四十瓦
ザラメ糖	三、〇
結晶薄荷末	〇、二
丁香油	三滴

右研磨細末として用に供す。

第十五　右の齒磨粉を、毛刷子に附着せしめ、齒面に貼り、上齒は齒頸部より、下方に向け、下齒は同しく齒頸部より、上方に向け、或は回轉反復して、以て丁寧に摩擦し、清淨たらしむ可し。必ず齒內に障害を與へざるを要とす。

第十六　食后には、必ず小楊子を以て、齒間及腐蝕窩

に嵌入せし食塊を悉く驅除し、而して微温湯を以て、能く含嗽すれば、齒牙の健全を保つことを得べし。

第十七　吾國の婦人は古より一般に鐵漿を以て齒牙を黒染する慣習ありしが現今染齒の婦人大に減せしと雖とも、未だ全く其跡を絶つに至らず。蓋し鐵漿は、酒酸を以て、鐵を溶解し、五倍子に逢ひて、黑色となるものにして、其鐵漿は齒の琺瑯質面を鬆粗ならしめ、滑澤を失へば直に染着す。平常健强なる齒牙は、染色し難くして褪色し易し。脆弱なる齒牙は、之に反す。總て如何なる健强の齒牙と雖ども、長く鐵漿を用ゐるに至れば、漸々脆弱に陷り、齒牙朽潰を免るゝこと能はず。

前條述る如く、齒牙發生交換期中、種々の病的碍害に逢ふと雖とも、適當なる方法を以て、豫防を務め、或は治療を施すときは、病魔の魅魍を免れ、一旦病的に犯さるゝとも速に治癒することを得べし。然れども其攝生及營養法を誤るときは、特有の本能を失ふのみならず、遂には病魔蔓延して、種々の痼痾を惹起し、爲めに天授の健体をして、空しく食寐起食の不具者となり、人生の本分を盡す能はざるに至るへし。豈愼まざる可けんや。

家兄遺草（五）

白松園主人篇

豐浦小學校紀念式の祝辭

おのれ、豐浦にありける時、友人某が、あすなん、豐浦小學校に紀念式すなる、其の庭に、已れもつらならんと思ふを、祝文かきてよ。あす午前八時までにといふに、もだしがたくて、うけがひおきつるをりから、又もだしがたき用事いできて、ある人のがりゆき

たるに、夜ふくるまでものうち食ひて、かへりきて、早くもうち忘れて、思ひ出さずして夜あけぬ。友人使おこせて、祝文たまはらんといふに、いたくうちれどろきつゝたゞ筆にまかせてかくなん。つみふかきわざなりけり。

年毎のためしにて、わざせらるゝ、これの學舍の紀念式よ、をよびをりつゝかゞなふれど、六度かさねて、七度となん、今年の今日はなりぬるとかや。うれしきかも、品ひきくさえみぢかきわれらさへ、あやにたふとき、祝ひの庭の列に入ることを許されて、めでたくかしこきわざを、をろがみまつることをえ、かつは敎へのつかさ、學ひの子たちが、いそしみつとめてものせられたる、あやしくたへなるいさをゝ見るにつけても、紅葉ぞのてりまさりて面あからみ、くちなしの花の、くちなしとのみなりまさりて、いはまほしき事も、いでこずなりぬ。打ちよする豐浦の濱の、ちりの數にもあらぬおのれらが、いかぞかりの事をかいはん、たゞつきかためたるこれのまなびのやの礎は、これの學の舍のをさの御心のしづめなり。つきかためたるいかめしきうつぞりは、これの里わの親たちの御心のたのめなりとなん。あなかしこや。

學文の目的といふ題をある女生徒に

かはりて

男といはず、女といはず、すべて學文するは、男は眞の男となり、女は眞の女とならんとするより、外の目的はあらぬなるべし。眞の男女といふはいかなるものぞ、男の事は精はしく知らねど、眞の女といふは、行末人の妻となりて、舅姑によく仕へ、夫を扶けて過なからしめ、家を守りて經濟をつとめ、子を生みては敎育に心をひそむるなど、何事も夫の爲めに身を盡して、節操あるなど、眞の女とはいふなり。故に故鄕にあるとき、學文に心を傾け、充分に女の道を會得しれかずぞ、容易に眞の女とはなりがたかるべし。さ

れど、父が朝每花園にいでゝ、草ぎりつちかひ給ふは、かをよき眞の花を咲かせん爲なり。日每妾を學校に通はせ給ふは、うるはしき眞の女にさせん爲めなりとぞ。

若氣の過

今更に語り出でんも、面ぶせなる事ながら、已れ幼き時より、只管軍人を慕ひて、日比軍記を讀み、演習を見などするにつけても、あはれ男子と生れては、劍を佩き馬に乘らではと、深く思ひ入りぬるを、嫡子なればとて、父は折々諫め諭し給ひしかど、思ひ止まる樣も見えねど、かばかりに思へるを、なまじひに止めては惡しからん、今一人の弟もをれど、などやおぼしけん、果ては止め給ふこともあらずなりにき。さる程に今より四とせの昔、十九歲といふ年に、試驗に應じて合格しけれど、年比の願叶ひて、兩親の別れ惜しみ給ふも、目には見えず、喜び勇みつゝ、吾嬬に上りて、ある軍人の學校に入りぬ。さて三日四日と過ぎて、七日と云ふ日の事なりき。朝の演習に出でんとて、用意する處に、國より電報來りぬ。まづ胸とゞろきつゝ、急はしく開き見れど、鮮かならねど、タダイマチヽシスとなん見ゆるに、傍なる友らも、さなんめりと云へど、即ちひたと胸つぶれぬ。呼出しの喇叭しど鳴りて、人々は皆出で行きしかども、獨り倚子に凭れたるまゝ、立ちも上らでありけるに、週番に追ひ遣られて、やう〳〵立ち出でけり、練兵場に行きても、唯夢の心地にて、目くれ耳塞がりて、號令も聞えず、足もとも見えねど、よろ〳〵とよろめき惑ひて、しど〳〵教官に打たれぬ。演習止みてかへると、再び電報を開きて、違へるふしもやと思ひて、操返し見れども、いかにも弟がおこせつるにて、本文も他に讀むべき方もあらず、彌よ實かと思へど、涙はふり落ちて人目もやさし、友らも慰めかねて、新井が父失せぬと、語り傳ふるを聞きて、同縣の軍曹の、同隊にありける某といふが召し寄せて、かにかくと慰めて曰く、歸らんと思ふなら

めど、いかなる事ありとも、修業の間はまかる事えならぬが、此所の定なれど、ふつに思ひ絶えて卒業の日を侍て、さてともかくもせよと、敎へさとされけり。之れを聞きてよりは、彌よわぢきなく、口惜しき事に思ひ細りて、ほと〳〵病にもなりぬべく、くづをれ居れど、されどとて、演習を休む事はつゆ叶はず、力なげに銃擔ひながらも、父に別れし折の事を思ひ出で〻は、日頃すくよかにおはし〻を、などてかくはうちつけに、なくなり給ひけん、と今更にいぶかしく、母は更なり、はらからのなげきさこそありけめ、如何に明し暮し給ふらん、歸りこぬ事を、本意なく心細くこそ、おぼしなげかせ給ふらめなど、思ひつゞけては、絶えも入りぬべき心地すれども、稻葉の風のそよとも、事とふ人なし。世の常にだにあらませば、切めてもの事ならましを、今は檻に入りたると同じき身なれど、喪さへ得せで、過ぐすことこそ、あさましき上のあさましき事なれ。やう〳〵一月二月とすぎ行くに、つら〳〵思へど、弟こそあれ、年ゆかねど、母を養ひまゐらする者は、我ならではあらぬを、軍人にては事ゆかじ、終身軍隊に從事すべしと、書きし誓文に背かんは、いと畏かれど、親を棄ては何事もせられじ、卒業せど、やがて軍籍を離れなんをと、ひそかに思ひたちぬるから、軍隊の事かにかくに、うるさくのみなりまさりて、高きより飛び、深きを越ゆるにも、我身は大事の身ぞと、思ふ心に勇氣けされて、おくれをとる事のみなりけれど、今は敎官にも見放たれ、友にも爪彈きせられて、淺ましき樣とはなり下りぬ。あはれ、故鄕を出立つきは〻、いかなる思ひなりしぞ、馬に乘らん、劍を佩かん、こかねの光りする服つけ歸りて、故鄕を輝かさん、(中略)など、あらます事の多かりしを、今よく思ひ見よ、げに父の諫も思ひ當りて、口惜しき事限りなし。母は折々につけて、こなたは、兎も角もして過ぐすべければ、心を安く勉めてよなど、ふみの便におこせ給ひしかど、さてそ便なからめと、思ひしにも

まさりて、いたましき有様にぞありたりける。五十路をこえぬる老の身もて、ようにもたゝぬ妹と弟とをなて、父がいまそかりし時、をさめおき給ひし、はづかの蓄を、杖柱とたのみて、朝夕細き烟をたてつゝ、我帰りこん日をなん、をよびもそこなはれんどかゝりに、待ちわび給ひける。世は暖けくなりても、我門には春の色なく、年豊なりとて、罵りさわげど、日を数へてのみ食ふわびずまひには、世の人にうしろ指さゝれじとて、子らが教育は、人なみにせさせ給へど、主なき宿は何事につけても、侮られがちなれど、さるをりをりにも、兄のをらましかばとおぼされきとなん。かくて己れはうき年月を、こゝら數へ暮して、三年といふとしも、やう〳〵になりて卒業しければ、家事故障をねぎ申しければ、現役をぞ免せられぬ。なづかしき故郷の空、かた時もいそがれて、夜を日につぎ、海路陸路をへて、やう〳〵宿近うかへりきつるに、門方に停めるものあり。これなん母にて、髪はおどろ〳〵しく、面しわみて、あさましう老すげ給へるが、我と見てうれし涙にむせびつゝ、はせ出で給ふ。ゆゝしく變り給へることゝ、思ふに妹も弟も出できて、まへうしろに立ちて、打ちまもるさま、うれしげなれど、我心には、父の見え給はぬにぞ、今更のやうに思はれて、うれしさも悲しさも、打ちまじこりて、涙も中々に出でざりける。内に入りて靈前にかしこまりけるが、とかく申し出づべき詞もなし。いわけなかりし時、教へられつる、父母いませど遠きにゆかずといふ本文こそ、今まさに思ひ合はせしか。

（をはり）

隨感隨筆（二）

白松園主人

當時の和歌壇

花と見し梢も、今は青葉とかはりしものから、わかやかにしげりゆくさま、いとすゞしげにて、清新まこと

に掬すべし。澤邊の螢、池の藤浪、さては山ほとゝぎすの鳴かんも近きにあるべく、詩人の天地も亦新なりといふべし。それにつけても目今の和歌壇は、錯亂混同、名づけんやうもなき心地す。殊に讀賣新聞に載せたるか如き、いと心得ず、明治は和歌の革新時代なる事は、誰れも疑はざれども、既に理想にもあれ、實際にもあれ、歌ふものとすれど、多少美術的ならざる可らず、多少高尚ならざるべからず、又從來の和歌には、大体に於て一定不變の格法あり。然るを革新といふ名はよけれど、實際は革新にはあらで、破壞的にのみ、傾きて、實に卑賤のもののみなるは、いかにぞや。かくては、何ぞ革新といふに及ばん。しひて三十一字の摸型ならでも、新に工夫創造せよ。今のにては、少しも、從來の狂歌俳諧と、區別なきをや。但し、竹柏園一派のは、稍や革新の實に於いて見ゆる者の如し。何ぞ、口にまかせたる卑賤のものを以て、和歌の革新といふを得ん。

東京に淫祠多し

寺院の僧、稻荷と稱して、祭る者あり。往いて見れど、狐狸の住む如き穴を設けて、傍に狐の土像を安置す。之れ、即ち、本尊なり。且、市中の神社、一見寺院の如きあり。鉦をさげ、又は、賤しげなるさま／＼の提灯を、處せげにかけ渡したり。甚しきは、神殿に同居せる者あり。その神を冒瀆する事、言語同斷といふべし。かゝる處にても、猶、參詣する者あり。殊に、年若き婦人を多しとす。女子は、由來迷信と嫉妒とに深きもの多し。迷信しては祈り、嫉妒しては禱る。豈、此くの如き、處に往いて祈るとも、何の益かはあらん。明治の日本人たらん者、殊に日本婦人たちよ、迷信を止めよ。抑、迷信は、意志の薄弱を證す。

女子東京遊學

東都の下宿屋に宿をしめたる學生には、放縱遊惰なるもの多し。女子にして、はる／＼國を離れて、遊學せんとする者、若し、知人親戚もなくて、同じく下宿屋

に住まむ忽ち、此の惰風、淫猥に感染して、一代を過つに至るべし。父兄たる者、心すべき事なり。

淺見絅齋先生

嘗、靖献遺言を著はして、勤王の志氣を鼓舞せり。平生其の徒に敎へて曰く、士の尚ぶべきは志にあり。之を物に譬へんか、彼の雁の北に志ざして飛ぶや、途にして死し、腐れて蛆を生ずるに、其の蛆、猶、北行す、云々と、瞑眩膊とすべし。（未完）

妻

安藤紫光

此の一篇は、文豪ワシントン、アービング氏の傑作と稱せらるゝもの、今拙劣を顧みず大意をこゝに譯載す。譯文の晦澁意をなさゞる所あるは偏に余の罪なり。幸に原作者を累すこと勿れ。語にいはく、江南の橘之を江北にうつせば枳となると。

われは屢婦人が剛氣を以ていみじき厄運をも凌ぎえたりし事を觀察せし時ありき。丈夫の心をうち破りて、失望の極遂にそれをして死せしむるに至る如き凶事は、なか〳〵に女性の全力を喚び起すくさはひとなり、時としては驚嘆すへきまでに、其の性をして剛く且高からしむるか如し。其の穩に無事なる日比は、たゞかよわくて依賴心のみ多く、すべていさゝかの事をも心にかけてのみありし温和從順なる一女子が、一度事起りては俄に雄心ふり起して、不運にあへる良人の慰藉者となり、扶助者とならむとして、困難の暴風吹き捲くをも顧みず、心確にたゆまざるを見るはかり人の心を感せしむるものはあらじ。

たとふれは樫の木のめぐりに纏はりて、久しく其の美しき葉を繁茂せしめ、且之によりて日の光に浴することを得たる葡萄蔓の若く、其の樫が雷鳴の爲に撃碎かるゝことありたらむには、その愛すへき蔓をまとひて、裂れたる枝を保つごとく、婦人たるものが、其の幸多

き時には、たゞに男子の被護者たり裝飾たるに過ぎさらむも、一朝おもはざる不幸によりて襲はるゝ事あらむには、宜しく男子の慰藉者となり扶助者となり、良人の心の奥深く同情を寄せ、心優しく憂にうなだるゝ頭をさゝへ、悲しみにそこなはれたる心を取繕ふへしとは、げにも上帝によりて美しく命せられたる事なるかな。

われはある友の、そか壯健なる家族の中にありて、いと強き愛情にまとはれてあることを祝したる事ありしに、友は熱心を面にあらはしていへりけるやう「げに妻子をもつぞかり世に幸福なることはあらじ、君若繁榮を得給はむには、妻子は等しく之に與るをうべく、君若然らさむには家族は君を慰むべし」と。

げにわれは人が、不運に陥りたるに當りて、之を未婚煢獨の人に比ぶれは、既婚の人がその地位を回復しうること多きを知りぬ。これかたへは、おのれにたよりてこの世にある助なく愛らしき妻子どもの必要に迫られて心の勵まさるゝこと多きによるなるべけれども、そのおもなる原因といふべきは、其の精神が、家内の愛情に慰め助けられて、たとひ戸外の社會はすべて暗黒にしておのれを辱しむるものゝみなるも、猶家庭には愛情の一小世界のあるあり。みづからはその君主たることを悟るによりて、その自重の念の猶發揮せらるゝことを得るによるなるへし。然るに、未婚煢獨の人はこれと事かはりて、みづから顧て物淋しく見捨てられたるおもひあり。たとふれど、住人なくあれたる家居の如く、其の心のおとろへゆくを感じては、心荒みて身をもおもひ捨てがちになるも理ぞかし。

是等の觀察は、われをして嘗て目撃せし一家族の物語を想ひ起さしむ。わが親友レスリーは、上流社會に生長したる、美しく且多藝なる一令嬢と結婚したりしが、まことにその令孃は財産をぞ有せざりしかども、わが友はもとより富りしかぞ、女をしてそのおもふがまゝに優美なる技藝に耽らしめ、女心を慰く所の樂しき

趣味想像にしたがひて、その望むがまゝに爲さしめむと、めでうつくしむ愛情とを惹起さしむるとぞみえたと豫想して悦びたりき。自いへるやう、彼女の一生はる。此の配偶よりも更に優りたる幸福の有様にて、夫妻作り物語のごとく樂しかるべし」と。

男は想像的にしてや、嚴格なる氣風なるに、女はよろづいき〳〵として喜ばしげなりしが、この夫妻性質の差異は、なか〳〵に調和ある結合をぞ生したる、余は屢集會の席上に於て彼の妻か交際に巧にして、衆客にもてはやさるゝを見つゝ、言にこそ發せざれ、レスリーの獨竊に悦べるを見き。余はまた衆客稱讃の中に立ちつゝも、猶彼の妻はさながら獨その良人にのみ愛せられ嘉納せられむことを請ふものゝ如くレスリーに眼を注ぐを見き。

良人の腕に倚れる時妻の痩せたる風姿は、レスリーの丈高く丈夫らしき體格とよくも釣合ひたり。女が愛らしき打任せたる風采を以てその良人を眺むる時は、レスリーをしてかくまでおのれに身を任せたる妻の爲には、いかならむ事もいとはじとばかり、忽勇しき自負

相和し愉快なる此の世の旅路に上りたる者はあらざるべし。

（編者云、夫婦の愛情は、さるべきことさながら、其の風俗、我が國とは、いたく異にしてけだかゝらぬを見るべし。）

兜人形といふものをみて

安藤紫光

その折々につけ、その時々にしたがひて敎へおもむくる事は、かしこき御世の御掟なりときけり。から人の春秋は禮樂を敎へ、冬夏は詩書を敎ふといへるも、かゝる心ぞへなるべし。桃の花さきてのどやかなる、上巳の節によりて、女子に家を治むべき手ふりを敎へ天清らかに心はれやかなる、端午の節によりて男兒に尙武の風をやしなはしむるは、よくその御おきてにかなへりとやいはまし。ことし五月端午の節、さる家に招かれて、その壇にかざれる兜人形を見てふかく感ずる

所ありき。
もとこの五月五日に、菖蒲を軒にかざりなどするは、支那のふるごとよりいでたるなれど、兜人形などを飾るは、まことにわが國ぶりなりけり。古は菖蒲をかつらにかざし、軒にさすのみなりしを、そのかつらやうやううつりて、建長のころよりは、うすき板にて、兜やうのものをつくり、そが上に、紙の人形をかざりなどすることとはなりぬ。兜人形といふ名は、かゝるさまによりてはせそめけむ。されど何故にかゝる物つくりいでけむかは知るによしなし。その後々も、いと質素なるものなりしに、元祿の頃より、奢侈の風はこの方にも及びて、人形と兜とは、全く相わかれ、古に名ありし人々のさまつくりいで、綺羅をよそほふに至れり。是ぞ今の如き兜人形のはじめなりける。そも〳〵この菖蒲の節に、兜人形をかざるは、菖蒲の音のにかよひたるより之を尙武ととりなしてなりけり。菖蒲刀などつくりいづるも、菖蒲の形の、太刀に似かよひたれどなり。古は藥玉などをとりかざりて、女々しかりしこの日も、かくたけ〳〵しき方にとりかけられては、いと面目あるべし。かくて男兒の幼き程に、かたへは之をもて尙武の氣をやしなひ、かたへはその兒のゆくさきをいはふ心をもひきかけて、とり行ふものとして、武家の時代には、盛に行はれたり。

そも〳〵わが國は、尙武をもて、國のもとゐとせる國なり。昔みおや伊弉諾伊弉冊の二柱の神のこのたゝよへる國を固成すべきみことをうけたまへる時、天神よりたまへる、天の瓊矛をもちて、しほこほろ〳〵にかきなし給ひぬ。天地のはじめより、既にかくのごとし。皇孫尊の、この葦原中國をしらすべき大みことをうけたまひて、この國に下りまし〳〵にあたりて、大國主神は國むけの廣矛をたてまつりて、皇孫の國家を平定したまはむ料となし奉りぬ。かくわが國は、神代より武をもちて立てる國から、けにも武を尙へる細戈千足國なり。されど、うつし世になりても、神武の帝を

はしめ奉り、御代々の天皇、皆大御心をこゝにそゝがせ給ひて、尙武は國のならはしにぞありける。かれ之を史上に見るに、尙武の風盛なる時は、皇室ます〱榮え、國は愈つよく、尙武の風おとろふる時は、皇室の稜威も盛ならず、國もつよからずなりゆきて、尙武の風の盛衰は國とともなふものなりともいひうべし。かゝれど、世々にその風をやしなふことは、つとめられたるを、こゝに達眼の士ありてか、菖蒲に尙武のゆかりをひきて、之を尙武の節とし、兜人形をつくりいでゝ、古名士の風をしたはしめ、以ちて尙武の風をやしなふくさはひとはなせる。

すべて、人は、兒童の際はど、感化力のふかきものはあらじ。幼き頃にふかく、心にきざまれたることは、幾年月をふとも、きゆべきものにはあらず。この兜人形によりて、兒童の感化せらるゝこと、果して幾何ぞ。古名士の風をしたひ、武勇をよろこぶは、もとより兒童の先天的にたもてる心なるを、この人形によりて、いよ〱その心のまさりゆくは、蓋うたがふべきにはあらざらむ。且その話說によりてきくよりも、その風采を見ては、ひとしほ心に感ずることふかきなりや。冥々の間に於て、尙武の風の養成せらるゝは、少小にはあらざるなり。袖かろく、心はれやかなる五月の候、家ごとに兜人形をかざり、旗幟をひらめかすさまの、いかに兒童の心にたのしきぞ、三々伍々菖蒲刀をとり佩きて、練りあゆむ兒童の姿の、いかにいさましきぞ、古の人は、かゝる事を以て兒童をたのしましめ、冥々の中以ちて精神教育の一助とはせり。さるを今は徒に、うはべの事よさにのみなづみて、かゝる事をなすものをぞ、かたくなりなどそしるものぞ多かるげに今は教育の道もひらけにひらけ精神教育などいふことも或は行はるゝなるべし。さはいへ、兒童の心をたのしましめつゝ冥々の中、その活潑なる精神をやしなひ、尙武の氣風を盛ならしむべき道は、ありやなしや。たとひありとも是またその一助とならでやは。

今の御代、三月五月などの節は廢せられたれど、たゞ公さまに行ひ給はぬのみ。ましてかしこき御わたりにては、ふかく尙武のことを御心にかけさせ給ふを、御代の民草、いかで尙武の道をおろそかにしてよからむ。さるからに近き頃は、とやかくとその道をわげつらふものもあれど、この兜人形のみは、世にすてられて、かざる者もいとまれ〳〵になりぬ。菖蒲刀も、いまはいかにかなりけむ。うたてやとおもひつゞけてみれど、壇上の兜人形の影さびしげに、色褪せて、そのいにしへをおもひいでがほなり。雛は女子の爲、兜人形は男兒の爲、いづれもともに、世にいださまほしき事にこそ。かくその折々につけ、その時々にしたがひて、敎へおもむくるは、かしこき御代の御おきてにも、かなへる事なるべきを。（三十年舊稿）



花吹雪

幽谷子

艶陽四月の天、滿都唯花となりぬ。人の心も皆花となりぬ。隅田川の畔、上野の岡の邊、人は宛ら狂ふとぞ覺ゆる。

日頃は忙しきまゝ、大方は斯くやあらんと、覺束なくも、盛りの色を、只心に畫きつゝ打ち過ぎつ、『たれこめて春の行方も知らぬまに待ちし櫻もうつろひ行くよ』と、口惜さは、あはれ幾夜の夢にか入りけむ。

十二日といふに一日の暇あり。前宵よりしきりに浮きたちて、明日こそは心ゆくまで花に醉はめ、十里の長堤たどり〳〵て暮しなむ『木の下蔭を宿として花やこよひの主』と、はや薩摩守になり了せたらん氣も、ことにをかしや。

朝まだきに目覺むれど。軒をめぐりて雫の音あり。雨戸を押して眺むるに、春雨そば降りて、前庭の枝垂柳、

たゞ珠を貫けるかと疑はる。かゝる折にこそ花にまことの風情はあれ。これひとへに詩神の惠ぞと、そゞろに嬉しくして、蛇の目の傘さしかざし、高足駄を穿き、待乳山へとこゝろざしぬ。

金龍山の石階を數へつくして、月見臺に上れど、眞下なる隅田の川さへ、狹霧のごと雨に蔽はれて、竹屋の渡しに案山子と見擬ふ渡守の、着たる簑笠に雨をおび、消然として掉を突きたて、客待つ姿の朧氣なるも趣あり。咲き亂れたる向の岸の櫻は、只一帶の白雲にして、おぼろ〳〵と打ち霞みたる、鮮明ならぬところ得もいはず妙なり。向島に渡らんには、白髯の渡こそをかしからめと、流れを上に沿ひて橋場に來り、身を扁舟に托して、渡守と共にわれも畵中のものとなりぬ。程なく寺島村に着きて、われは岸に上り、舟は再び客迎へんとて櫓聲長閑にきしらせつ。

常ならむ此の邊迄も、花見る人は、いやが上におしかさなりて、酒に醉ひしれたる者の狂ひ舞はんに、今日は行更ふ人も三々五々にして、高足駄の歩みゆたかなるは、われと同じき心の人にやあらん。

顧れど、行手も後もたゞ一筋の花の道にして、兩側より花の枝さし交したれど、身は宛ら花環の中をくゞるが如し。

遠く望めど來る人は花の中より來り、去る人は花の間にその姿を隱す。筆にも口にもつくし難き景色は、見れども〳〵飽かず。今は三春の思出はれぬ。過ぎし春の暮、花に分れし夕より、たゞ今日をこそ待ちしか。あなめでたし、あなうるはし。邪氣なきわが心は花に染まりぬ。あらず、わが心は花か、花却りてわが心か、われは我にあらずして、花も花にあらず、無我にして無心。嗚呼われは只管醉へるがごとし。

十里の長堤、踏み盡さんも興なきわざなれど、せめては梅若塚のあたりまでと思ひ、おもむろに歩みを運べど、雨は、尚もしと〳〵と降りしきりて、しばしの小止だもなし。十二分に咲き亂れたる花の、露重げに垂

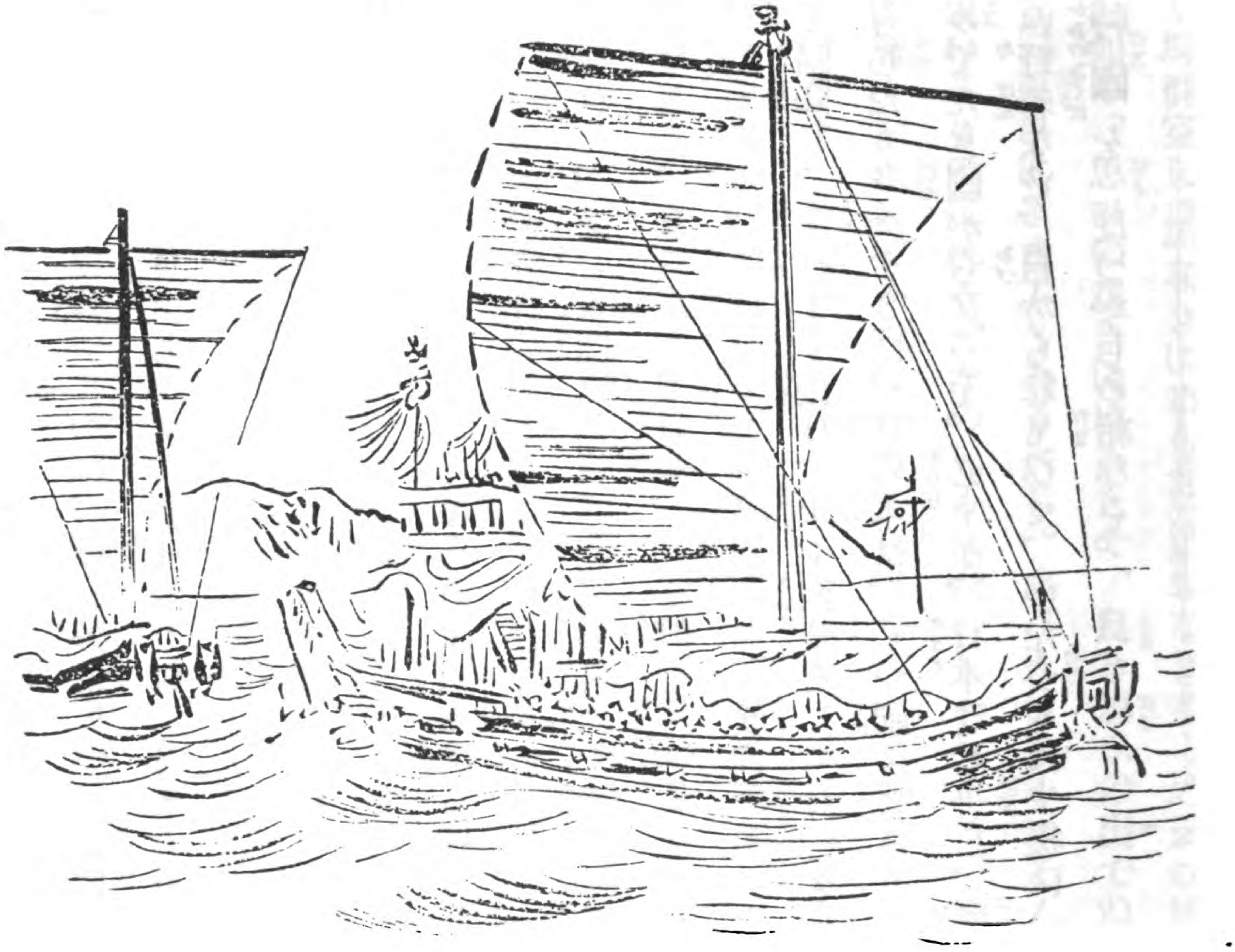
頽れたる氣色は實に、
雨の神花の神としめやかに語る
かと疑はるゝなり。
木母寺には人の影すら見えず。梅若の塚を覆ひし兒櫻の枝に、親雀待つ子雀の寂しげなる聲せしが、風なくして花片四つ五つ舞ひて、わがさす傘の上に止まりぬ。あはれ今幾日して世は花吹雪となるらむ。
寓に歸りて書齋に入れど、風の音習々として、枝垂柳の枝窓に觸れたり。久しく見ぬわが故郷の櫻も、この風には大方散りやしつらん。



大和ばなし（二）

蓬生屋女史

かけまくもかしこき神功皇后、息長足姫命が天たらし、國たらし、御世たらしましゝ大御功を聞き奉るに、仲哀天皇、熊襲を御征代遊ざされしかど、克たせ玉はずして、にはかに神上り給ひけれど、皇后は之をかなしませ玉ひ、此の御事、天が下にしらさど、群臣の心もくじけ、敵は益機に乘じて、平らぐること能はざるに至るべしと思ぼし、乃ち天皇のかくれましゝ御事を固く天が下につゝみ、大中臣烏賊津連、大三輪大友主の君、物部膽咋連、大伴武以の連等に仰せて、百官を率ゐて、宮の御内を守らしめ、後、武内宿禰に命じて、海路より穴戸に遷し奉り、殯宮をつくり、萬の毛物を生けぞり、之をいけはぎ、之をさかはぎ、いけにへとし御尸を荒磯海に埋め奉り、國の大秡をなし、さて、武内大臣を沙庭に居らしめ、天つ御神の御命せをうけ奉られけるに、天照大神をはじめ奉り、底筒男、中筒男、上筒男三柱の大神あらはれ給ひての給はく、國は、御子しろしめさす、かつ、先きに、天皇にのりし如く、西方に、たくぶすま新羅とて、金銀を以て本とする國あり。信にその國を求めんと思はゞ、天つ神、地祇神、また山の神、河の神、海の神に悉く



幣帛を奉り、我が御魂を船の上にすゑ、眞木の灰を瓠に入れ、また、箸、及び、比羅傳を多くつくりて、皆を大海に散りうかべ、以て渡るべしとのり玉ひぬ。皇后、乃ち、神のりごとに從はせ玉ひ、意を決して新羅を討たんとおぼし、群臣にのり玉ふやう、我れ、今、上は神だちの御かげを蒙り、下は汝等の助けによりて、軍を起し、船をとゝのへ、韓國を討たんとおもふに、事ならば、汝だち功あらん、もしならずば、我れ一人罪あらんと宣はせ玉ひしに、何かはいなまん、群臣みなかしこみて、皇后國家のために計らせ玉ふを、臣等如何で從ひ奉らざらんと皆かしこみ答へ奉れば、皇后よろこばせ玉ひて、諸國に令し、船をあつめて兵を調へ玉ひ、やがてみ船も人も足りしかば、皇后乃ち神祇を祝ひ吉日をトへさだめて、男子のさまにいでたゝせ玉ひ、もろ〳〵の軍人を誡め玉ふに、旗鼓みだるゝときは、軍人とゝのはず、私を思ひて內を省るときは、敵の虜とならん。敵は少なくとも侮るべからず、

多くとも恐るゝなかれ。奸ましきものは許さず、みづから從ふものは殺すなかれ、戰ひ勝つものは賞し、逃げ走るものは罪せんずとのり玉ひしに、もとより大和男子、みな弓づるうちならし、いさみ〳〵てすゝめど、海原の魚は大小をとはず悉く御船を負ひ、神風に日の御旗を飜がへし、皷うち鳴らし、すゝませ給ふ御勢に、魚もをどり、浪もとゞろきて山も河もゆらぐばかりなり。新羅此の風を見て、いたくおどろき、いたく恐れて、降を軍門に乞ひ、金銀彩帛八十艘を御軍に從はしめ、なほ之より毎年、八十艘を貢物となさん事を約したり。隣國なる高麗も百濟も、また風をのぞみて歸降し、それより後は、永く西番として貢物をもたらしたり。かやうに、日の本は、とつ國にまさりたるめでたき國がらなるを、必ずな、日本はせまし、開けぬ野蕃など、自からられもひて、いたづらに牛後につき神國をはづかしめ給ひそ。

魔睡劑

田端留守居

魔睡劑よく人を睡らしむ。魔睡術、よくその睡りの中に云はしむ。よに恐ろしき劑、恐ろしき術とすれど、それは、たゞ一時の事なり。よに一生をねぶらせ、夢の中に一生を過さするいと大なる魔睡劑こそあれ、飽食、暖衣、即ちその方劑にて、人、春風のあたゝかなる夜には、睡眠あくを知らず、鶯のあさとき聲、聞く事、まれに、しろきあけぼの、ながむるまた少なかるべし。木枯のもるふすまには、つゞりさせてふきり〳〵すの聲、さながら枕の下に、身をさす如く聞え、あはれもいとゞ深草の野も山も思ひやらるゝなり。食にまたあく、あく折りは血しほ胃にあつまりて、睡眠をもよほす。もの窮すれど思ふ。逸居しては心うかに、身ゆるびて、思ふ事なし。思ふ事なしと云ふ、思ひのなきにあらず、韓退之のいはゆる白樂一度冀北の野を過

く馬群空し。馬なきにあらず、良馬なきなりと云ひけるが如く、思ひのなきにはあらで、良き思ひの出でぬにて、思ひはさま〴〵あるべし。まづ人はあくにあくを求むるものなれど、たのしみにたのしみを求め、奢りに奢りを求め、あたゝかき衣にうつくしきあやをえらび、うまき食にいよ〳〵うまきを求め、はては仇なる戀の思ひさへ加ふれど、いたづらに春嬉と晏起とに世を過すばかりは世の中の事、人倫の事をあきらめんとの思ひもなく、眼は閉ぢざれど、さながらねぶるが如く、物は云へど、さながら夢の中に物云ふ如く、一生をたゞ夢見て、遂にさむる折りなく、永眠するに至るべし。此の人や、一時の魔睡劑を知れど、一生の魔睡劑を知らず、夢の中に入たるを知らず、いたづらに走るしかばね、行くし〳〵となりて世に語り、世に笑ひ、興ず。さながら胡蝶の如く、舞ひつ、狂ひつしてはつるに至るべし。あはれ、人、現の人、現を知らんと欲せば、醍醐の帝のむかしに習ふもかしこけれど、まづ衣をうすくし、食を減じ、世を思ひ、人を思はゞ、うつゝ心、おのづからや出でなん。

張合（その三）

白魚女史

瓢や〳〵、我れ汝を愛す。汝起るとき、我もたち、汝臥すとき、我れ横はると、客人の歸りしあとも、なほ心よく唱ひながら、瓢を枕に勝の横はらむとする折りしも、外の方より、お父さまと呼びて、少女の歸り來れり。瓢どころではあらぬ、愛する〳〵我が子のかげ見るより早う、文代、何をなしをつた、大層今の叔父がほめをつたが、そちは、そちは何か云ひをつたか。何ぞ。歌をよみをつたと、なまいきなど云ひつゝ、起きて坐われど、少女は得たり貌に、膝に這ひ上り、お父様、今の叔父さまのうちのね、お父さまのやうに、白くはなけれど、やつぱり、髭がある、ね、お父様の

やうな、あの叔父さま、ね、あの叔父様はよい叔父さまね、妾はあの叔父さまが一番すきだは、お父様のやうにえらさうだはとて、白髮鬚をたぐりつゝ、父の顏をうち守るに、父は暫らく返答もなかりけるが、おゝあれは、ほんにえらい叔父様どうして〳〵、お父さまはよれもつけないとて、何が爲めかつく〴〵と歎息にかきくれたり。

少女ながら、父が異樣の歎息、つく〴〵と感じて、何となく力なくなり、鬚たぐり居りし手もうち放なすに、父や、げんきづき、もう父さまのお鬚の塵は拂はれてか、よう塵を拂ひくれた、御褒美には、何をとらせやうなとて、撫子のかしらの塵、これもかき拂ふ折りしも、先きの紳士の中の年重さなるが再び尋ね來れり。うはさすれば影、勝は驚きけるが、何かれ忘れなされてかと文代を膝より下ろして、流石に問ひたり。否忘れものにも何にもあらねど、異なれはなしを致さまほしさに參じたり。今一度席をかされよとて、靴を拔ぎつゝ上りたれど、さて、急には言葉も出さず、主人が顏をつく〴〵とうち守り、またまろびをる瓢をながめたるが、やがて文代に眼をくばり、孃さん孃さんはほんに可愛ひ、可愛いお子、叔父は血脈のやうな心地がゑます。のう御主人、愚拙の兄など申しては、誠に穢らはしく覺さむが、實は私に一人の兄があり、其の兄は、二十年前何が爲めか、家を繼ぐを厭ひ、出でゝ諸國を廻ぐり、遂に北海道にまで亘り、時候にやをかされけん、空しくなりしと、人の告げしが、其の兄年は己れに二つ高きのみなれど、君には大分の弟にて、其の容貌も、若き時なれど、定かにはわかず、また、かはりもそらんが、何となう君に似通ひ、まして、瓢や〳〵の御聲と云ひ、歌ひぶりと云ひ、かの瓢の格合まで、ゑかも、之は誠に失禮、何とも申わけなき、失禮ながら、君が額のほくろまで、同じ所に二つまで、またあやしきは我が胸のどうき、かの市に鬪うて、兄を得たりと云ふ、呉文章のむかしさへ思はれ、何とな



う、なつかしう、先きに幾度か、云はむと忘れたれど、數ふれば御年も違ひ、況してわが兄は黄泉にあるをと忍び行きしかど、如何にも〳〵あやしきは胸の動氣、違ふことなく思はるるは瓢や〳〵の歌ひぶり、姫御前さへたゞならずなつかしう忍ばれて、〳〵、遂にうしろ髮ひきかへし、かくは訪ね參りしなり、笑はせ玉ふな、之が佛の申す因緣と申すものにやとて、から〳〵とうち笑ひ、のう孃さん、をかしき叔父は、孃さんがいとしくて、なつかしくて、叔父の御子になさまほしうさへ思ふよ。いやでせうな、立派な御父さまのれはすに、のう、御主人、見奉る所、御一人子なれど、嫁になどれつかはしにはなさるまいなど詞の卑きにも勝の威嚴あるはくまれたり。

勝、何がためか、え堪へず淚をはら〳〵と疊にふりかけしが、いや、もう、數ならぬものを、さやうに思ぼす、冥加と申すもれそろしき程に、遂ひ淚をこぼし候。かやうに意くぢなき者、御兄などとは誠に恐ろしう、ましで、此のいくぢなき者の子、殊に母のみまかりし後は、不憫に忍びず、たゞ砂糖漬にのみ致し候へど、いよ〳〵甘くばかりなり行きて、我れならぬ人親は、嘸かし物たるき心地やせられむ。こや文、叔父さまが大層お譽めなさるが、今に大きうならば、かうやうの褒詞にも、耻かしからず思ふやうなれやと、淚をわが子の愛にまぎらはすもあはれなり。

いや、もう、さやうに愛せられて、さやうにかしこき御子、實に悴の妻に致さまほしう候。かく申さば、親の口よりには候へど、悴は浪男とて、まだ青二歳ながら、中々見識ありて、黄ろき口に出る言葉も、親ながら感服するばかり、あなをかし、愚な親心、御笑ひ下されとて、またや、自からから〳〵と笑ひたり。

白川と云へど、都にも多からぬ博士の中にも博學の聞えある人なり。其子浪男又なみ〳〵ならぬ秀才と大學にても、世にても擧つて譽め、勝も、すぐれたりと、文代にさとせし事もありたり。さやうの人親に、かく

まで譽め慕はるゝ勝父子、又世にありがたき人ならん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

文代、そちは馬鹿ではあるまいな、父さまばかりではない、人の親の眼にもとまりて見らるゝから、いな〳〵あれは血脈なれどならん。こや、文、今よりは勉强して、賢こき人となれ、去年はしかとゆるさざりしかど今に都より迎に來るであらうが、叔父夫婦によく仕へ、浪男にもなみ〳〵ならず思はれよ。かく云ふ父はな、父は何時ぞやとはれし、叔父のはむの兄なるが、我が父なる人、我れよりはあの弟をかしこきものとして、家督も弟に讓らまほしうせられながら、なほ、長幼の別を重んぜられて、强ひて此の兄に讓らんとせらるゝ心をとく知りたれど、父はな、おろかなれど、强情もの、少さき時から、人にわけなく首さぐるがきらひにて、或時人と爭ひ、あやまれとて、首の骨の折れるばかり押し付けられても、なほあやまらざりし爲め、强情者の字をさへとりたるほどの心に、まさらぬものとせられて、讓りたくもあらぬ白川家、繼ぐはいまはしと思ひ、志あれどとて、其の儘家を出で、如何にもして、弟にまさり、耻をそゝがむとせしかど、親の眼に違ひなく弟に勝れたりと思ふふしは更になく、家よりは度度の書狀ゆく先き〳〵にこおして、必ず立ち歸り家を繼げよとあれど、一旦思ひ立ちし旅衣、かへす心は更になく、北海に渡りたるときうるさゝにみまかりしと人の手をかりて告げやり、姓も黑川、名も一郎と呼びしを、勝とかへ、何時かまさりて、耻をすゝがむとの念たにず過ぐしゝこと二十餘年、昨日はじめて志を遂げ、間もなく梓にも上ぼらん。よし、世の人は我が高論かへり見ずとも、また見る人ありて如何に惡評するとも、我は、弟にまさりたる文をつくり得たりと思へど、今は心も耻しからず、最早死すとも耻かしからず、そちは兼ねて浪男の妻にと望まれしが、我が耻ぢ洗がぬ内は、そちを送らんもはづかしけれど、其のまゝに過しゝが、

昨日此の望み遂げたれどつかはさんと、書狀送りたり。今にも都より迎へに來ん、必ず夫を大切に、父が子决して其の身をれとすな、海士と共に住みしと笑はるゝな。父は望み達して力もぬけたり、可愛けれどそちを殘して遠からず後の世にまかるやも知れず。文、のう、文、思へど悲し、正行、正行とて、父があとに母のありて、敎へられて、かしこうなりしを、そちはやがて孤兒、ひとり心を賢うせずどならぬぞ、よしや、しどし、思ひ迫る事ありとも死ぬなどの心を出すな、父よと呼べ、父は何時も汝が呼ぶ所に行き、御身を助けて遣る、思へど可愛い、可愛い、今日までながらへて、望みを達したもそちの母がそちを殘し置きたるどかり、のう文、はづかしけれど親にさへおろかに見られしわれを御身の母は二つなく慕ひ、二つなく仕へて呉れた、あゝやさしかつた、信實であつた、死んだ後までも、そちのやうな白玉を殘し、我の心を慰さめ、玉の緖をつなぎ、遂に望みを達せしめたも、御身の母のため、しかし、今となつてはそちが氣にかゝりて、此の世をいさぎよく立つことが出來ぬ、愛らし愛らし、父さまは御身が可愛くて、可愛くて、此の膝をはなすがをしいほど、やがては浪男に此のやうな可愛いがられ、思はれよ。のう文代。悲しいか、悲しいか、泣け、〳〵、泣いてくれ。そちを殘して行く己れの心を汲んで泣いてくれ、泣いてくれとて、固く抱きしめて、はら〳〵と涙をこぼしたり。

（つゞく）



大原女　　東久世通禧

はぎ高くもすそかゝぐる大原女も
都のはなにかぞへられけり

湊川懷古　　佐々木高行

濁なきみよにあひてもみなとがは
いとゞむかしの忍ばるゝかな

河上春月　久我建通

大ゐ川かすめるまつの木の間より
もりくる月のかげぞのどけき

垣若草　津輕承昭

椿さくにはのかきねにひくさも
やゝもえいでゝ春めきにけり

張良　宮地嚴夫

潔くくつをさゝげしむくいにぞ
よにふみいでん道は得にける

雨後花　北郷久政

春さめのにごりもすみていけ水に
かげみえそめし山ざくらかな

春蝶　植松有經

梢よりちりくるはなとみえつるは
かげにむつるゝ小蝶なりけり

春色　阪正臣

見ゆるもの皆のどかなりみ山木の
このめもはるの色にいでつゝ

山路雉　鎌田正夫

足びきの山のかけぢのはつわらび
をりつゝゆけど雉鳴くなり

國旗　加藤義清

天のしたてらすひかりの日の御旗
くもらぬ御代のしるしなり鳬

山家述懐　三浦千春

世の外とおもひ入りにしみ山まで
もれぬは君がめぐみなりけり

名所關　鈴木八束

すゞが山ふりにし關のあとゝへど
今は名のみぞ世にとゞめける

垣山吹　三輪義方

かきねゆく里の少女がくれなゐの

そでにかつちるやまぶきの花

小宮君歐米派遣の舟出しけるとき　大畑弘國

まさかりの花を手折てかへらなん
國のひかりも照りまさるまで

かりがねの春におくれて別るとも
秋にさきだちはやかへりませ

清少納言　赤松景福

君ならでたれかはそれとしら雪の
ふる日に御簾を高く卷くべき

王昭君　足立正枝

むかし見し鏡のかげもたのますむ
をしくは人のうつさゞりけん

山田歌子　佐々豊水

種子島のあまとなりても言の葉の
花のにほひぞゆかしかりける

武内大臣　安齋篤敬

大君につくすこゝろはもゝとせを
三度すぐともなにかはるべき

閑庭椿　木庭芳香

人とはぬにはこそ今朝は淸げなれ
白たまつばきはなもうるはし

韓信　宇井正夫

いさら水いはがね遠くゝゝりてや
はては千ひろの海となるらん

桃花　近衞貞子

咲く桃のみになる時をたのしみに
はなのはるよりまち渡るかな

徳川光圀卿　蜂須賀隨子

植ゑてみし花はもゝ世を重ぬれど
わかきこゝろの色ぞにほへる

殘鶯　前田朗子

うぐひすも昨日の春をなづかしみ
青葉がくれにたえずなくなり

花のころ故郷の友に　小池道子

故さとの花のたよりをきくたびに
むかし遊びしともぞこひしき

引田部赤猪子　北島以登子

みわ川にあふせまちにし老のなみ
掛りしそでやいかにぬれけん

行路花　松平健子

さしてゆく方もわすれて道のへの
花にこゝろのとまりぬるかな

のどかなる日濱べにいづ　保科節子

拾はゞやうめの花かひさくらがひ
かすみわたれる濱づたひして

蛙　原田蒼生子

さくらちる木の下水にこのゆふべ
雨をこひつゝなくかはづかな

山落花　三宅龍子

きのふけふとふ人稀に成りにけり
花ちりそめしやまのしたいほ

夕春雨　河村重子

柳はらかげもかすみてすみぞめの
ゆふべ淋しくはるさめぞふる

春の歌の中に　海上壽子

玉ぼこの道行くつとにをりかざす
はなにむつれてとぶ小蝶かな

寄虎祝　足立みつを子

もろこしに住むてふ虎も日の本の
國内になるゝきみが御代かな

春浦　土岐いく子

はるされは心もゆたになるをかた
うらべのどかにかすみ渡りて

墨田川の花さかりなりときゝて
母をしぬぶ歌　海上壽子

すみだ川、堤のさくら、咲匂ふ、花をし見むと、みや

び男は、馬にくらおき、をとめらは、を舟にのりて、おのがしゝ、いむれゆくとふ、あはれわが、母しいまさぞ、もろともに、手たづさはりて、たぬしけく、愛ましものを、おもしろく、あそびものを、母はしも、世にしまさねぞ、花見むと、おもひも出でず、うつゆふの、こもらひをりて、ねのみしなかゆ。

こゝろの花

井上頼文

枯野

櫻巷子

花もなき枯野のをぐさかくてだに
春のまうけのなからましやは

新年戀

門毎に立てるこまつのふたならび
つゝがなくしも思ふころかな

年の暮に

硯の海珠もひろはずとしなみは
つくゑの島によせんとすらん

山路木枯

一山のひゞきとなりて暮れにけり
大木倒こえのこがらしのかせ

冬の歌の中に

かれくさのさやぎさびしき夕川の
きしのやなぎに時雨ふるなり

山落葉

常磐木の葉も折々はちりくなり
あらし烈しきまきのしげやま

山路霜

あらくまの通ひし跡ものこるかな
ゆふしも白きたにのしたみち

海路時雨

ほの暗く沖邊はくれてしまひとつ
見えぬふなぢに時雨ふるなり

林冬月

ところ〴〵黒きは松が葉も散りし

雜木はやしのふゆの夜のつき

行路霜

門べ行く人のあしおとさやかなり
大路はいたくしもこほるらん

木枯

白雲の三ひら四ひらに吹きさきて
高根のつきにこがらしぞ吹く



雜報

●皇大神宮木造祭　去し廿九日、行はれたり。

●行啓　皇后陛下には、去し廿一日、東京上野公園なる音樂學校に、行啓せさせ給ひ「惶き御影」をはじめて、九曲を聞しめさせ給へり。

●東宮慶典　さいつころ、有栖川宮殿下には、皇太子殿下御敎養掛伊藤候等を招かせ給ひ、立皇太子妃の御事を、御協議せさせ給へり。

●貞宮殿下御百日祭　去し廿日は、御百日祭にわたらせ給ひしをもて、宮中の靈殿、及、豐島が岡なる御墓どころにて、御祭を行はせ給へり。

●功臣愛護　天皇　皇后兩陛下、皇太子殿下には、さいつころ、川上參謀總長の病になやめるを聞しめし、深く御心にかけさせ給ひ、岡澤侍從武官長、黒田東宮武官長に、其の日々のありさまを、下問せさせ給ひ、且、日毎に、病狀書をも奉らしめ、なほ、いにし日、岡侍醫をつかはし給ひて、診察せしめ給へり。

●古墳　伊勢の國、鈴鹿郡、國府村、字西の城といへる官林に、瓢形の大塚あり。周圍には壕をうがち、あたりにも、十餘の小塚ありて、陪塚と見えたり。近きほとりの木の根などを堀れど、くちたる古劍などの出づることあり。これ或は、日本武尊の御墳墓にもやとて、そこの有志者相はかりて、古墳取調の事を出願せりと聞く。

●白河城趾　かの戊辰役にて、名かくれもなき白河城のあとは、今は、見るかげもなくあれはて丶、空しく、狐狸のすみかとなれるを、其處の有志者、いたくこれを慨き、四時遊覽の地とせんとて、このごろ梅櫻數千株を植ゑつといふ。修羅の巷も、遊覽の境となる、これ亦、大御代の御惠にこそ。

●孝貞　上杉子爵母堂は、こたび、賞勳局より、左の褒狀を授與せられたり。德行感ずるにたへたり。

子爵上杉勝憲養母　喜　武

資性貞順歸嫁以來病夫に事へ能く婦道を竭くし疾患沈滯荏苒癒へず衆醫概ね治術なきを告ぐるや居を閑靜の地に移し誠悃輔養日常病室を開閉して寒溫其度を均ふし或は徹宵身體を撫摩して痛痒其望に飽かしめ排泄物の處分も亦未だ曾て他人の手を借らず時に轉地遊浴に從ふことあれど起臥行止須臾も其の左右を離れず専心獨力看護に盡すこと二十年一日の如し夫歿するの後髮を薙り室を守り姑の病に侍する等德行卓絶洵に奇特とす

●孝子　廣島縣の人、廣戸勘市といへるは、今年十八歲なり。養母には、はやくわかれ、養父勘藏は、癩病にかゝりて、起起もまゝならぬを、勘市、自、車を作りて、之に乘せ、諸所を挽きありきて、遊覽せしめ、日夕、看護怠なきに、近隣の人々、みな之を賞せざるはなしといふ。○又、福岡縣の人、山本定吉といへるは、年十四歲のころより、家政をつかさどり、孝行のきこえ高かりき。さるを、去年の冬、適齡にて、兵役に就き、家には、父母と、弟妹三人のこり居て、赤貧洗ふが如くなりしに、見聞く人々、定吉の孝心深きを賞して、物を送りて、めぐめりといふ。

●奇特　下野國、足利町に住める平岡某がむすめに、ちよとて、十七歲なるがあり。さいつころ、足利小學校にて、開校式のありし日、我が親戚の老婆の年七十歲に餘れるを、背負ひて、こゝかしこ、群集の中をわけて、遊覽せしめたるを、見る者、皆、感じ合ひ

きとぞ。

●報師恩　同じ足利町なる足利尋常高等小學校訓導小菅伊三雄といへるは、はやく良敎師のきこえありしが、このごろ、肺患にかゝりて、宇都宮病院に入れり。さて家には、ことし六十五歳なる老母一人のこり居て、家計もゆたかならぬを、高等四年生等、相はかりて、金十餘圓を醵して、贈れりといふ。〇又、秋田縣、仙北郡、神宮寺小學校訓導宇佐美某は、こゝに在職九年になれるに、近き頃、眼病にかゝりて、職を辭せり。これも、生徒一同、金十餘圓を醵集して、贈れりとぞ。〇又、福岡市の理髪職本山某が弟子に、原爲雄といふあり。主人ふと、重患にかゝりて、病院に入りて、病を療するを、爲雄、獨、其の業を勵みて、主人の妻子を養ふのみか、藥餌の料をさへ、とゝのへて、朝夕怠なしとぞ。そこの理髪業組合のものども、あはれと思ひて、金をれくりて、賞せりといふ。何れも、皆、感ずべし。

●篤學　新潟縣の人、阿部たまといへる少女は、兩親ともに、盲目なるが上に、家いと貧しきがなかにも、みづから、學資をとゝのへて、尋常小學科を卒業し、同じところの、阿部吉太郎といへるは、家貧しきが故に、一度は退學したれども、人に雇はれて、給金を得、之を資として、再、入學せんことをいひ出でたり。人之をあはれみて、この二人に、各、金五圓をめぐめりといふ。〇又、紀州、東野上小學校の生徒、井口清太郎といへるは、今年、十三歳なり。これも、家貧しくて、學資を得んやうなく、まだ十歳にならぬさきより、郵便配達人となり、其の料を學資として、尋常小學科を卒業し、今は、高等二年生たり。さて、其のいとまには、二人の妹に、讀書を授くるを例とすといふ。まことに、たのもしき心ざへなり。

●女學校運動會の趣向　長崎女子裁縫學校にて、催したりし運動會の趣向なりといふを聞くに、先、茶碗に水を盛り、容儀正しく、之を持ちて進み、到着點の

臺上に、客に供すると等しく、懇におき、其處に備へたる、針、絲、布片等をとりて、定れるほとまで縫ひをへ、一禮して、立ち歸るなりといふ。さて優劣は、水のこぼれざると、縫目の正しきと、歸ることの速きとを勝とするなりとぞ。よき思ひ付きなり。

●東北各縣人の特質　なりとて、或る人のいふを聞くにいはく、宮城縣人は、快活にして、才幹あれど、忍耐に乏し。福島縣人は、敏達にして、氣骨あれど、守操に乏し。山形縣人は、沈重にして、學才あれど、決斷に乏し。秋田縣人は、敦厚にして、奇才あれど、結合に乏し。巖手縣人は、素朴にして、忍耐なれど、活氣に乏し。青森縣人は、活潑にして、氣節を負へど、定見に乏しといへり。あたれりや、いかに。

●臺灣師範學校　は、臺北、臺中、臺南の三地に置き、島人にして、國語傳習所、公學校、及、書房義塾の教員となるべき者を、養成するなりといふ。其の教科目を、修身、國語、作文、讀書、算術、簿記、地理、歷史、理科、習字、唱歌。體操、教授法の十二課とし、修業年限を三箇年、生徒入學年齡を十八歲以上、三十五歲以下とせり。

●習學寮　東京帝國大學醫科大學第二年生大野禧一といへる人、夙に、學風のおこらざるを慨き、書を大學總長に致して、舊各藩習學寮を、都下におこして、之を救はんことを請へり。今、其の書中の要とあるところを拔き出でんに、

まづ、現今社會の弊風、及、其の原因を說きていはく、

(上略)世を顧みるに、或は遊惰にして、其の業を務めず、教坊に戯れて、國家を顧みず、金錢を以て重しとし、人心を以て輕しとす。動すれば、則群飲し、繼ぐに博奕を以てする紳士あり。嘗、學禮の何たるを知らず、己の嗜慾を恣にし、妓樓に流連し、婦女に戯弄す。身性腐敗し、學事荒暴し、門風を辱賤し、父母を連累し、自身を破滅し、社會を荼毒す。家事を顧みず、國家を憂へざる學生あり。人の妻となつ

て、家政を知らず。日を遊惰に送りて、俳優を品隲し、不敬、不順、驕慢、放肆婦の務を知らず。其の夫を凌侮す。嘗、閫敎を知らざる婦人あり。幼にして、偏鍾慈愛、義方多闕、訓誨に加らず、婦禮を聞かず。容を他門に失ひ、耻を宗族に取る少女あり。動靜輕脫し、視聽定らず。入ては、則、髮を亂し形を壞り、出でゝは則、窈窕態をなし、道ふべからざる所を說き、視る可らざる所を觀る。婦德、婦言、婦容、婦功の何たるを解せざる女生あり。敎育普及せざるにあらず。學術隆盛ならざるにあらず。而も今、此くの如し。其の故何ぞや。正心誠意の工夫を知らざるによる。正心誠意の工夫を知らざるは、世の禮儀廉耻を重んぜるに由る。世の禮儀廉耻を重んぜざるは、學風の起らざるに由る。…………

また、敎育家、及、父母の憂勞と、習學寮を起す必要とを說きては、

こゝに熱心有德の敎育家あり。實踐躬行、自、率先して、これが模範となり、頑迷愚鈍の學生を感化して、明敏活達の性を得せしめ、鷙獰慓悍の青年をして忠直剛毅の質を得せしめ、而して後、之を他校に傷ひ、陶冶の功をして、空しからしめんには、其の遺感、何ぞ、窮りあらん。幼にして聰明又、師友の感化する所、夙に、憂國の心を抱き、身を持すること嚴正、事に處すること廉潔、將來有爲の青年をして、百行一失、周圍の影響する所、昔日の志を失ふことあらしめむ、青年のために惜むべきのみならず、又誠に國家の爲に之を惜む。古語に言はずや、邦國は、一人を以て興り、一人を以て亡ぶと。今、又、本年一月、文部省報ずる所の敎育事務要領を閲するに、兒童の小學にあるもの、總數四百萬。その中學にあるもの、合せて、五萬二千。小學兒童の八十が一に過ぎず。進んで高等の學に入るものを算するに、四千五百に上らず。僅に、小學兒童の九百が一に當る。若、夫、大學に至ては、その茲にある者、僅に

二千五百餘、小學兒童千六百人中、實に一に當る。今、父兄、その子弟を敎育して、之を學校に入れ、その師を選んで之を托す。母儀し父訓へ、慈敎嚴に、義方烈に、幸に之を家庭に得るとも、之を小學に傷ふ。父兄の痛惜知る可し。幸に之を小學に得るとも、之を中學に傷ひ、之を中學に得るとも、之を高等の學に傷ふ。父兄の悲哀何ぞ堪へん。若。夫。大學に入るものは、天下の秀才、小學兒童千六百人中、僅に、一人のみ。今こゝに之を傷ふことあらむ、父兄の痛惜悲嘆、國家の損害不利、是より大なるはなし。故を以て、嚴父は朝夕に憂勞し、慈母は夙夜に苦痛し、寢食を忘れ、以て其の惡風に陷り、品性を傷はんことを恐る。而して。今、學風を振起し、行爲を監督し、士氣を鼓舞し、感化を普及し、人物を育成し、この憂患を救ふ策、之を泰西の制に照し、之を吾國三千年來の風習に考ふるに、吾が各藩習學寮を起すより善きはなし。豈、啻に、敎育家の憂勞のみならんや。是、吾國數十萬の家庭を治むる良妻賢母の願ふ所なり。

また、現今寄宿舍の現狀を說きては、

今、夫、帝國大學寄宿舍を見るに、只各縣學生の合宿所のみ。三番の學舍、自修室の數合せて六十、之を區劃するに、各分料を以てし、又、其の他を顧みず。以爲らく、分科を以て、之を區劃し、各科に部幹一名を置く。各科、互に、相戒しめ、美風、その間に起らんと。而も這般の制、彼等をして、その間に、一個の學風を得せしむるには、餘りに漠然たることを知らざるなり。分科を以て、之を區劃す、その制や甚、美なり。然れども、分料の間、常に安危を共にし、休戚を同うすべき機動を與ふることなくんぞ、又何の用をか爲さん。請、試にその機動を與ふる。一策を云はんか。自治制となす、最、可なり。

今、在舍學生の數、各、分科に同等ならしめ、分科

の中、各數名を互選せしめ、之を理事と名け、その中、又、各一名を互選して、理事長となし、任期は、各、一學年とす。各分科の理事長は、理事と相議して、その分科のことを處理し、各分科在舍學生の學事品行は、一切之を理事長の責任となす。又別に、德識名望兼備ふる高潔の君子をして、舍監の任に充て、舍監理事相合して理事會といふを組織し、學生の入舍退舍、放舍譴責、豫算衞生炊事一切の事を處理せしむ。舍監を以て議長に擬し、理事を以て在舍各分科學生の代表者たらしむ。入舍は、全く抽籤年限の法を廢し、理事の紹介により、學生に限り、理事會の決議を經て、之を許す。舍監は、理事數名の申請により、理事會を開き、在舍學生の中、學生の體面を失するものあるときは、出席理事三分の二以上の議決により、その學生を舍外に放つ。舍監は寄宿舍學生を代表して、大學評議會に出席せしむ。理事は、隔月一回の雜誌を刊行して、諸般の事件を報告し、又兼ねて、帝國大學各分科大學の告示、日誌、叙任辭令、其の他一般公示の具たらしめ、又政治に亘らざる範圍內に於て、在舍學生、及び、舍外學生の意見を發表することを得せしむ。雜誌は各分科大學、諸敎授諸先生一般に配付し、內閣、內務、文部の三省、各高等學校、中學、其の他諸專門學校、及び、社會の有力なる敎育家に配布せしむ。理事數名を選んで、編輯の任に充て、又別に演說部を設け、理事數名之を擔當し、毎月數回開會し、諸敎授、諸先生、舍外、及、舍內學生の大學全躰に對する意見、其の他、名論卓說を發表し、兼ねて、又、相互に討論するの機會を得せしむ。此くの如くにして、學生互に責任を分ち、一脉の活氣、學生の中に起り、寄宿學生は、完全なる、一個の有機機關となり、こゝに大學特有の學風勃然として起らん。

今は、則然らず、宿舍は、學生の秩序なき合宿所のみ。その分子箇々分立し、多くは、互に其の歴史を

知らず、互に其の性質を知らず。一物の以て彼等の安危休戚を同うす可きなく、一事の以て、彼等を協同一致せしむるもの無し。吾より好んで、その行爲に干渉することなく、彼より吾が意に逆ふて、之を戒しむることなく。此くの如くして、養成せられたる一種冷談の氣風は、學生相互の間を犯し、今や如何なる行爲をなすことあるも、恬然として顧みる所なきに至る。又何ぞ切磋あらん。又何ぞ感化あらん。此くの如くして、學風の起ることを望む、誠に木に據りて魚を求むるが如し。

學風振起策

諸藩の習學寮を起すに至ては、則然らず。その集むと所は、同縣同藩の士なり、固よりその歴史を知る。固よりその性質を知る。某々は、如何なる人にして、某々は如何なる性質のものなるかを知る。惟夫知る。於是乎、人物の高低を生ず。才識あるものは推され、愚鈍なるものは斥けらる。是、人物自然切磋せしむるの道なり。加ふるに同縣同藩なる一事は、彼等をして、是非とも、興廢休戚を同うせしめ、是非とも、協同一致の運動をなさしむ、十室の邑、忠信丘の如きあり。一縣一藩の秀才、豈、棟梁の材なからんや。今これを以て、學寮の監督に充て、學寮一切の風紀を處理し、學寮所屬學生の學事品行、一切その責に任せしむ。若、望む可くんば、其の制を次の如くせむ可ならん。今この監督に與ふるに、理事なる名稱を以てし、寮毎に、その數を三名となし、任期は、之を一學年とす。外に寮中委員若干名を互選せしめ、學生十名に對し、委員一名の比例となし、寮毎に理事委員共に委員會を組織し、入寮退寮、衛生炊事、其の他一般の事を議し、或は、之を負擔せしむ。委員の任期は、同じく一學年とし、理事委員共に再選を許す。又、各藩所屬の學生は、必、その學寮に入らしむ。若、事故ありて外に在るものは、必、其の籍を學寮の名簿中に列せしむ。又別に大學より先進高

德博識の士一人を選んで、之を學寮監となし、理事と共に、理事會を組織し、學寮制一般、及、學生全躰に關することを議せしむ。學寮監を以て議長とし、理事を以て、各藩習學寮學生の代表者たらしむ。學寮監は、理事十五名の申請により、理事會議を開き、某學寮學生にして、大學々生の躰面を汚すと認むるときは、出席理事三分の二以上の議決により、その習學寮の理事をして、その學生を放ち、その籍を學寮名簿中より除かしむ。學寮監は、又、理事十五名の申請により、除籍學生にして、改心の見込ある時は、理事會を開き、出席理事三分の二以上の議決により、その學寮理事をして、その學生を復籍せしむることを得。一學寮より、籍を除かれたるものは、他の學寮に入ることを許さず。學寮監は、學生全躰を代表して、大學評議會に出席し、理事會は、雜誌を刊行し、各學寮、理事會、及び、全學生に拘はる諸般の事件を報告し、又兼ねて帝國大學各分科大學の告示、その日誌、叙任辭令、その他、一般報告の具たらしめ、又政治に亘らざる範圍内に於て、學生の意見を發表することを得せしむ。雜誌は、各習學寮、各分科大學諸教授諸先生、一般に配布し、內閣、內務、文部の二省、各高等學校、中學、其の他、諸専門學校、及び、舊各藩諸侯有力なる教育家、有志家に配布せしむ。此くの如くせむ、一藩の學生安危力を同うし、盛衰心を一にし、遠近相持し親疎兩ながら用ひ、理事は學寮の名譽を保ち、學寮學生は、互に不名譽なる學生を出さゞることを注意すべし。此くの如くして、人物、各、その能を盡し、俊才その材を致す可きなり。事情、此くの如きに至る。是、大學手を下さずして、學生を監督し、士氣を鼓舞し、感化を普及し、人物を育成し、學風を起す所以にあらずや。

また、この事業を成さんことの難からざ　を説きては、此くの如くにして、校紀張らず、學風起らざることを望むとも、其れ得べけんや。若、夫れ、幸に各藩

の子弟にして、高等學校、中學、其の他の諸學校にあるもの、亦こゝに入ることを得ず、從て、彼等の風儀を矯正することを得ん。

菊地東京帝國大學總長閣下、今舊各藩の諸侯にして、藩中の子弟の爲、習學寮を建て都下の惡風に感染せざらんことを謀り、又有志家と協力して、藩中の貧困なる學生を補助するもの、頗る多し、熊本の如き、鹿兒島の如き、福岡の如き、佐賀の如き、山口の如き、愛知の如き、石川の如き、福井の如き、或は育英會といひ、或は輔仁會といひ、或は時習社といふが如き、各、その名を異にすれども、皆その目的を同うし、只、或は、企圖の初歩にあり。或は既に完成の位置にある別あるのみ。今各藩習學寮の設立は、僅にその規摸を大にしその事業をたゞ擴張するに過ぎず。閣下にして、帝國大學寄宿舍解散の期を以て、若、往て、舊各藩の諸侯に說き、在來の事情を陳し、目下習學寮を起すことの急務なるを訴へ、大藩は獨立し、小藩は、その隣りせるものと聯合せんことを請はゞ、諸侯は喜んで閣下の說を容れん。他方には、事情を具して、天下に公告し、大に有志家の同情を請はゞ、有志家は喜んで事に從はん。加ふるに、大學は、吾國秀才集る所その藩侯にして、これが爲に、習學寮を建つ、藩主は永久不滅の美名ありて、學生は一生忘る可らざる恩惠あり。是、藩侯と舊臣との交誼を永遠に持續する所以。閣下往いて、一度之を說かむ歟諸侯は喜んで、之を贊せん藩主なき縣下は、有志家をして、之を起さしむるも可なり。有志識者、豈、何ぞ之を拒むことを爲さん。此くの如くして、閣下の事業立ろに成らんのみ。

更(さら)に、都下(とか)下宿(げしゆく)の弊害(へいがい)を說(と)きていはく、家に室を有すること幾十、人こゝに居り、人こゝに學ぶ。その與ふる所の食料、間代、收支、相較して、その間に利益を得、之を以て、其の生業となす、之を下宿營業者といふ。今府下に、數萬の學生を入る、這

般の營業者を生ずる、固より自然の理、否、寧、學生の以て便利とする所、故に、正當の範圍内に於て、其の利益を收む。彼等を責むるに辭なしと雖、近時、本鄕、神田の下宿營業者の如きは、貪婪飽くなきの奴輩多く聞く學生學費の三分の二は、全く彼等の貪る所なりと。昨年米價暴騰するや、從て、其の食料と間代とを加增せり。而も彼等の剛欲なる、近時物價の下落を聞けども、其の價格を遞減することを知らず。今、又、帝國大學寄宿舍解散の令を聞き聯合して、再、其の價格を加へんとす。貧しきもの、之が爲に、知人を便りて、普通の家に寄寓すれど只、正直と安價とが、己の商賣を盛ならしむる唯一の手段たるを知らずして、相互に同盟し、以て、警務に迫り、素人家下宿生を退治せんとす。何ぞ品性の卑くして、貪婪飽くなき守錢奴なるや。固より、中には、安價と、正直とを旨とし、時價に從て、其の價格を上下し、又よく學生を救ふものも之あらん。然れども、彼等の多くは、皆此くの如し。其の他、魚店、野菜店に於て、その店物の少しく腐敗に傾くを見るや。速に之を下宿屋に運はしむるを以て見れど、衞生の程度如何を察すべく、下宿屋樓中、粉黛を施せる小女を見れど、其の風俗如何を察知すべく學生のこゝに遊惰となり、こゝに墮落するを思へど、其の惡弊の、こゝに沈積して、社會青年を賊することの深き知る可きなり。

（下略）

●勇婦　婦女子といへども、時にふれては、くじけぬ勇なかるべからず。台南、阿公店庄内に住める婦女數十名、土匪のひそかに歸り來て、かくれ居たるを知り、其が家をとりかこみて、之を捕へ、直に辨務署に訴へ出できといふ。○又、日本赤十字社病院の看護婦に、白川清子といへるあり。さいつころ、鮫島中將病にかゝりて、入院しつるが、ふつに、看護婦の言をど、用ゐざりしを、清子嚴に說きすゝめしかど、中將も、つひに、之に從ひきといふ。これよく、職を盡し

て、屆せざる勇婦といふべし。

●女子体育部　日本體育會にては、このたび、皇后陛下に奏請し奉りて、其の一部に、女子にかなへる体育の一課を設け、下田歌子をはじめて、外八名の婦人に、委員を囑托せりとぞ。

●日本赤十字社病院船　このたび新造せしものにて、一を博愛丸といひ。一を弘濟丸といふ。平時には、兩ながら郵船會社にて、香港、浦潮間の航海に用ゐ、戰時には、赤十字社にて、傷病兵を運ぶに用ゐるなり。我が國にては、病院船のはじめなり。

●脊髓彎曲　佛國にて、このごろ、徴兵体格檢査を行ひしに、自轉車乘の名士は、何れも不合格なりきといふ。こは、脚部の筋肉のみ、よく發育して、胸部の發達にぶく、且、脊髓の彎曲したるが故なりとぞ。近き頃、我が國にても、自轉車、しきりに流行すれど、之を作るもの、乘るものともに、心すべきなり。

●肺病の新療法　獨逸國博士オットー、ワルテル氏は、バーデン黑林のノードラッヒにて、今、肺病の新療法に、從事せりといふ。同地に、三ヶ月半滯在して、治療を受け、健康を回復して、このかた、三年間、再發せずといへる英人ギブソン氏は、「十九世紀雜誌」に、實驗談を掲載していはく、明治廿八年、肺病に罹り、二人の醫師に見放され、愛蘭にて、三ヶ月間牛乳にて生活し、後ノードラッヒに赴けり。偖、ワルテル博士の療法は、第一體量を增加することにて、之が爲め、十分に食物を取らしむ。食物は、普通品にて、分量は、博士の指定に從ふ。時間は、朝八時、晝一時、晩七時にして、間食なく、又、藥料を與へず。第二は、休憩と運動との割合を正確にせんが爲、一日四回づゝ熱度を量り、博士は、之を見て、横臥、休憩、又は、運動を命ず。第三は、清淨なる空氣を呼吸することなり。ノードラッヒは、一千五百尺の高さにして、四周樹木にて、村落までは、長距離あり、四季とも、晝夜窓を開け放ち、時としては、取外すこともありといへり。

●矍鑠　伊豆の國、三島の久保といふところに、號を無外居士とて、須田茂平といへる翁あり。今年九十八歳になれども、身のすこやかなること壯年の人も及びがたきばかりにて、日毎に巨石を捧げて、筋骨を練り、一日に五たび粒食すといふ。○又、福島縣、信夫郡、餘目村の舊家に、久目木とよといへる嫗あり。今年九十歳を重ねながら、身いと建なり。さいつころ、西第二師團長、そこの縣に到るとき、自、餅をつきて、これに、

　　のどけさはかはらぬ御代の春なれや
　　　咲けよかをれよ山櫻花

と詠じて、添へてれくれりといふ。○又、陸中の國、九戸郡、久慈村に住める三浦九八郎が母、龜壽といへるは、年九十六歳になり、子孫百七十名ありとぞ。得ましきは長壽なり。

●奇形兒　備前國の人、藤芳某が妻、このごろ、一兒を生めるに、この兒、顔には目なくて、臍の兩脇にあり。さて、肩には角を生じ、足は、牛の如くにて、大なる瓜二つに分れたりときく。

●大蜘　遠州、中泉町の人、大橋某、蠶を飼へるに、夜毎に、蠶の失するに、あやしと思ひて、ひそかにうかゝひ居たるに、大なる蜘出で來て、之を食ふなりき。捕へんとせしかど、はやくして、え捕へざりきとぞ。

●郵便貯金心得　遞信省告示の要領をかゝげんに、

一貯金預入申込書には印鑑を鮮明に押捺するを要す

一貯金通帳には必ず預入申込書に押捺したる印章を直に押捺し置くべし

一改印、轉居、改氏名等を爲したるときは直に其屆出を爲し同時に通帳相當の欄に改押又は訂正を加ふべし乃ち改印、轉居を爲したるときは直に貯金取扱局所に於て該屆書式紙を申受け相當手續の上之を該取扱局所又は郵便爲替貯金管理所又は同支所に差出すべし尤も該式紙を用ゐざるとき若くは改氏名を爲したるときは適宜の料紙に認め前同樣の手續を爲

すべし

一貯金預け人同居者なるときは必ず其同居戸主の氏名を肩書に爲し置くを要す

一改印、轉居屆其他貯金に關し差出す書面には必ず其通帳の記號番號を明記すべし

●巴里大博覧會の面積　明年四月より巴里に開設すべき世界博覧會にては、我國の出品の爲に、配當せる陳列所の面積、及び、各館の坪數等左の如しといふ。

一教育館	第一部	教育	九十二坪餘
	第三部	學校用具	
一美術館	第二部	美術	未定
一シャンドマルス館	第四部	機關	四十六坪餘
	第五部	電機	三十坪餘
	第六部	土木	六十一坪餘
	第七部	農業	二百四十六坪餘
	第十部	食料品	
	第十一部	鑛業	三十坪餘
	第十二部	絲物及織物	三百七十坪餘
	第十四部	化學工業	三十坪餘
一園藝館	第八部	植物	未定
一山林漁獵館	第九部	山林漁業	六十一坪餘
一マンプアリード館	第十三部	裝飾及び家具	
	第十五部	各種の工業	六百十七坪餘
一殖民館	第十七部	殖民法	未定
一陸海軍館	第十八部	陸海軍	未定
一萬國會議堂	第十六部	社會經濟	十五坪餘
一トロカデロト園庭		日本美術歷史参考館 喫茶店及び販賣店	六百三十六坪餘

この面積の内より道路、空地、階梯等に要する部分を除けば、物品陳列架に供すべき場所は、この面積の四分の一なりとぞ。

明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

五月廿日	歌	牡丹	五月十日〆切
	文	郭公	
六月五日	歌	瞿麥	五月廿五日〆切
	文	遠方なる叔母君の病をとふ文	
六月廿日	歌	浦夏月	六月十日〆切
	文	遠方より母の病を訪れたるに答る文	
七月五日	歌	團扇	六月廿五日〆切
	文	待雨	
七月廿日	歌	橘姫	七月十日〆切
	文	蟻	



五月五日兼題　海邊新樹

天

みつ汐にかげをうつせる若葉より　肥後國下益城郡松橋町　友永章子
たつのみやこも夏をしるらん

地

舟よせてめでにし花のあとゝへは　東京本郷區龍岡町十九番地　横山柳子
しげるわか葉にうら風ぞふく

人

昨日までかすみてみねしいそ山も　肥後國熊本市寺原町　仁保基子
涼しくしげるなつ木だちかな

秀逸（十首）

よる浪の色もみどりにみゆるまで　和泉　福原菫子
磯邊の木々は生ひしげりけり

浦人のたのむかげともなりにけり　甲府　名取よ志子
磯の木だちのわか葉しげりて

みわたせは磯山さくらみどりして　東京　諸井久良子
うらのすかたも夏めきにけり

船とめてあまもしむしは息ふなり　出雲　山根久子
みどりしげれる岸の木かけに

うちよする浪間に春はきえゆきて　大阪　高橋雪子
いそへの木々は若葉しにけり

きのふまであまがかざしゝ磯山の　東京　都水春子
花はあを葉といつなりにけむ

よる波にしつえをひたす磯もとの　三河　永井さい子
木々の若葉のいろのすゞしさ

芝の浦やなれし海邊と見えぬまで　東京　下田興子
みどり深くもなれる木々かな

見渡しのあまの苫屋もみえぬまて　伊豫　白石梅子
いそべの木々は若葉しにけり

いそ山のわか葉の色にわたつみの　伊豫　高市とし子
みやこも今やなつをしるらん

（以下原稿到着順）

夏のひはあまがたのまんかげなれば　根岸豊子
いよ〳〵しげれいそのみどり葉

見ろ人もなみにうつりてしげるなり　森やす子
あまのとまやのにはのかゝみ葉

みつ汐のいろよりもなほみどりなり　永目甚子
うみべにたてる木々のわかばは

年へたるあかしのうらのさきは木も
なつきにけりさいろぞまされる　那須昌子

吹風にふる葉はおちてわかのうらの
なぎさのまつはみづゐさしけり　村崎包子

いそ山にゆきさみゐたるさくら木も
今日はわかばのみどりさぞなる　黒田明子

舟よするいそやまかげにさしかゝる
あをばははるのはなにまされり　虎口資子

海のそこなみにみどりのおやなすは
いそべにしげるわかばなりけり　溝口貞子

若葉さす濱邊の木々のしけりあひて
なみにうつらふいろぞゆかしき　中山登美子

若かへてしげる葉風にあはんさや
あみ引くあまのつさふなるらん　久米貞子

花にみしうみべのさくらちりはてゝ
いまはあを葉のかけわたるなり　中村壽枝子

うみのべにうつらふ月のひかりだに
うさくなりけりわかばしげりて　淵井阿子

いそやまの花もいつしかちりはてゝ
みさりすゝしきうみのおもかな　羽室梁子

きのふみし花のこずゑはうつもれて
いそのやま邊はわかみどりせり　安孫子かづ子

日さかりはあまか小舟もよりくらむ
わかばすゝしきいそのやまかけ　田代艶子

うちよするあらいそなみに山さくら
はなはちれさもわかばいろます　田代綾子

わたつみの緣こふかくしげりあひて
わか葉すゞしくなりにけるかな　佐々小琴子

あまが家も青かきふしになりにけり　佐々有鄰子

さく花にしほのやへかぜいさひしも
なつしらかしのわか葉しげりて　坂本遊多歌子

きのふみし花はいつれの木すゑそさ
わか葉すゞしくなりにけるかな　住山識子

もしほやくあまのさまやは埋もれて
あを葉にたさるすまのうらひさ　小笠原元子

すみのゐの松もみさりのうらかぜに
しけるあを葉にたつけむりかな　菅原松子

みわたせは青葉しけりてきのふけふ
すゞしくみゐてなつはきにけり　森山悦子

すみよしの木ゝの若葉は茂りあひて
ふれの出入りもわからさりけり　上杉光子

あまかやの軒のわかゝしわかはして
なつなよせくるおきつしらなみ　横山すか子

あびきするあまの小舟もみゐぬまて
おきのみるめもすゞしかりけり　阿保松子

ちぬの浦あまのなかめしさくらはな
しけりあひけりうらのこずゑは　高橋かれ子

なしみてし花のおもかげ消ゐはてゝ
ちりてあを葉になりにけるかな　森山英子

いく千代もしげり〳〵しあらいその
みさりあらそふあはちしまやま　西元さも子

海はらのなみもみどりになりにけり
まつのみさりのいろそまされる　石井登子

あまのすむさまやの軒ぞかくれゆく
水ぎはのわか葉しげりあひつゝ　絲甲智子

ながすの浦木々の梢はしげりあひて
日にましげる木々のわか葉に
なみもみどりにみゐにけるかな　古富彦子

うちよするなみの荒磯のなつのそら
こずゑひさしほいろまさりけり
村上昌子

佐保ひめの眞袖ながすのうら〳〵さ
にほふわか葉ぞいろまさりける
平山政子

つりたれしあまの小舟のそれならで
わか葉すゞしきはまのまつかげ
森川儀子

花ならはかならんものをあまの子か
しづやの木だちわか葉さしたり
山田琼子

いつしかさ木々は青葉になにはがた
なみにもなつのかげうつるなり
青木たま子

みわたせは浦回のきゝもおきつなみ
おなしみさりになりにけるかな
尾倉益子

いそやまにわかはしけりておき遠く
こきゆくふれもみねすなりけり
羽田み緒子

しけりあひて風はもられさいそ山の
わかばのおくになみの音そする
河田いし子

うな原のなみのみさりやうつすらん
きし邊の木々はわかやぎにけり
吉田ひさ子

ひきあげしはまの小ふれに磯やまの
わかはのしつくふりかゝりけり
船田八眞子

うちつゝくはま邊にしける若みさり
こずゑになみのかゝりけるかな
佐藤信子

いつしかに磯やまかけのはな散りて
わかばのひまをゆくしらほかな
木下菊子

いそやまの木々も青葉になりにけり
やがてすゞしきかげさなるらん
竹村貞子

海べにはわかきみどりの木々生ひて
かはらぬみさをちひろもふかし
原正尾子

みなそこにあるも常盤をかへぬかな
みさりいろこきみづの邊のまつ
瀬川總尾子

浪よするいそへの木々もみつ枝さし
おなしいろなるかけのすゞしさ
清水すみ子

きのふみし花の木ずゑもこのあさけ
あをばにかはろうらのさくら木
德永萬壽子

きのふみし花にかはりてうらかぜの
わか葉にそよくおさのすゞしさ
德永廣子

かげうつす花の木ずゑもけふみれば
わか葉にかはろうらのさくら木
小森田輝子

花はさくちりにしすまのなつ木だち
しげるさくらのわか葉ゆかしも
澤田春子

夏木だちいろうるはしき葉さくらに
けふはいさはねうらのあさかぜ
澤田十萬里子

しほかぜよ吹かはふけかし惜みつる
はなもなぎさの木々のこずゑぞ
西艶子

みわたせばなじまのはまの若かへで
こずゑすゞしくなりにけるかな
山田きよ子

もしほたくけふりのすゑは磯ちかき
わかはのかけにたちまさひつゝ
笠木かず子

なみよするなぎさの木立みさりして
田子のうらわもなつめきにけり
武田粲子

いづくかもかなたの島の見ねぬかな
うみべのこずゑあをばのみして
河村君子

よろ浪さいろもひさつのわかみどり
いそやまさくらいつこなるらん
佐々敏子

和田つ海の風やさるらんいそやまの
みどりすゞしく見ねわたるなり
笹子茂子

海の色ににほひあひけりいそやまの
木ずゑになつのかけしけりつゝ
敷島花子

汐あみてたちよるかげとなりにけり
きしのわかばのしげりあひつゝ　綿野りき子

よるなみの色もみどりにみえにけり
いそへのわかばかげをうつして　小野寺てふ子

あまがすむ家居ののきのわかぬまで
しひのこやてもしげりあひけり　尾崎嘉子

なみの音たかしのはまのなつ木だち
わか葉のつゆのみだれあふらむ　竹村竹里子

みつ枝さすのきの若葉にかくれけり
はなには見えしあまがとまやも　立石哲代子

月かげもなみにうつらずなりにけり
いそ邊のやまもみどりさしけん　神田秀子

藻鹽やくあまがとまやも見えぬまで
しげりにけりな木々のわかもえ　長尾五十子

うちよする浪もみどりに見ゆるまで
いそべの木々は茂りあひにけり　坂田きみ子

さらぬだにうらのみるめも涼しきを
いそべのこだちしげり合ひけり　名取正代子

あら浪のよせてはかへる伊豆の海の
小しまのこだちみつ枝さしそふ　絹川ますゑ子

あまの子がふれこきよするいそ山の
さくらのわかばしげりそめけり　日吉あさ子

花ちりてわかはしげれるすみのゑは
きしうつなみもみどりそひけり　高尾はきの子

こゝろさへすまの浦わのなつこだち
わかはすゞしくゆふかぜぞふく　牧瀬かう子

率土が濱に生ふるひさ木の若葉こそ
ひさしかるべき世のためしなれ　藤井芳子

夏さればはまのひさ木のわかやきて
はななぎさのながめ添へけり　藤井うめ子

いそ山のあをばしげりてうなばらに
見わたすかぎりみどりなりけり　寺尾まさ子

いそざくら青葉しげりてつりぶねの
かげ見えぬまでなりにけるかな　寺尾さかへ子

みさご居るあら磯なみにみどりばの
うつるあたりはすゞしかりけり　小林かつ子

すゞしさは又ひとしほにまさりけり
わかばのみどりうつるいそべは　佐藤さしみ子

ふな人はいかにたのしくこぎくらん
あをばのかげのうつるあたりに　佐藤縫子

まつしまや小じまのさくら花ちりて
ひとつみどりにしげるころかな　野口三子

うちよする浪のそこにもみどりなる
いろこそうつれうらのわかばに　林環子

あく人もかけによりきておほいその
わか葉さきめくなつ木たちかな　賀茂從子

いそ山はすゞしきかぜのやとりとて
さくらのわか葉なつもなつかし　村田多豆子

いそ山やわかゞへるてのなつかげを
あきにまさるとあまはいふなり　河合ぬひ子

浦の名のひがさもいらずなりにけり
いそわのわかばしげりあひつゝ　加藤加壽子

ゆきとみしいそ山さくらはるすぎて
わかばのみどりなつめきにけり　服部萬子

夏もまたあさきわか葉にうらかぜの
かよふかつゆのたまとみだれて　吾妻ちか子

しほがまの浦ふくかぜにいそざくら
わか葉そよきてつゆぞみだる—　杉浦糸子

あひきするあまが軒端のわかかへて
めさしはなにおくれさりけり　舘脇ます子

うら風にみたれてちるはたまかしに
たまとおきたるつゆにぞありける　佐々木富子

うちよする波にみとりのいろそへて
わかばすゞしくみゆるうら〳〵　新海わか子

なつ木立うらのとまやののきちかく
わかみとりなるいろぞすゞしき　伊賀直子

雨そゝき日をふるまゝにうみのへの
わかばのかげぞすゞしかりける　新隈よれ子

うなかみのよする濱邊のならのはの
あを葉のいろになつは見えけり　戸塚てつ子

波のうへに浮みいてたるこゝちして
わかばさやけきおきつしまやま　日高かず子

波路ゆく帆のみえぬまてなりにけり
いそやまざくらふかみどりして　芳香子

老いしげるあをばのかぜやゆく舟を
まねくと見ゆるしばうらのはま　田尻さた子

なみあらき海にもあらは染むと見ん
おきのしまべの木々のみとりを　關澤きゑ子

花にあく身にはうみこそたのしけれ
きしの木ごとにみとりよそひて　關澤きく子

いそ山のこずゑのこらすわかばして
みるめすゞしきなつはきにけり　岡田やう子

うちわたす大うなばらもきよらかに
みぎはのわかばしげりぬるかな　坂田康子

磯やまのこずゑのつゆのちる見えて
わか葉をかへすかぜのすゞしさ　大溪しげ子

豊うらのみなとあたりはなつなれば
わかばをくらく見えにけるかな　萩原章子

あま小ふねめあての松もわかぬまて
木々のこずゑはみどりしにけり　大音ふみ子

汐かぜにあれにし木々もわかばして
なつこのましきはまべなりけり　須磨つた子

わかみとりかけさす磯のみなそこは
あさきもふかきこゝちこそすれ　吉田せき子

つれにみし濱べはきゝの茂りあひて
ゆきこふふれもみえずなりけり　吉田げん子

いつしかもあを葉しけりてしま山も
こかげすゞしくなりにけるかな　阿部興宇子

磯やまのまつにかゝれるふぢなみも
ともにあを葉となりにけるかな　山田稻子

あまのすむ浦のいそやのなつこたち
影みえぬまでしげりあひにけり　岡多代子

しらなみのよせてはかへす海ばたの
いそやまつゞきあをばしてけり　目黒佐喜子

よる波に木々のわかばのかげみえて
すゞしくわたる須磨のうらかせ　山田婦美子

しろたへの花もみどりにいろかへて
いそまにうつるかげのすゞしさ　山田靜子

藻鹽やく海士のふせやも木がくれて
わか葉しげれるなつはきにけり　關平千賀子

あまの子のしほ燒ころもふきかへす
かぜもれぬまでわかばしげれり　三股崎美留子

うちよするなみの色さへみとりせり
きしべのまつにわか葉しけりて　河方き代子

涼しくも見えわたるなりこくうすく
わかばしけれるをちのしまやま　金森俊子

茂りぬるわか葉のいろもめづらしく
　はなのあささふきしのさくら木　服部錦子

し保風にのころふる葉はさそはれて
　わか葉しけれるなつこだちかな　服部桑子

しまやまのきゝのこずゑそ繁りける
　きしべのなみやみさりなるらん　淵本家壽子

しらなみに花をゆつりていそざくら
　けふはあをばにうつもれにけり　椎野ぬき子

みまがひし花はそれともわかみどり
　波よるきしにしげりあひにけり　下田春子

すみよしのまつの木の間の花ちりて
　おなじあを葉にしげりぬるかな　持地桃枝子

涙のはなもらぬまでにもなりにけり
　いそへの木々のみどりしてより　野中あさろ子

さくら花ちりてののちもうらかぜに
　あをはのつゆのかをるころかな　宇高きい子

水技さすかけなづかしみたちよれば
　そてをはらひてし保かぜぞふく　大谷津峰子

五月五日兼題　自ら戒むる詞

人　伊勢宇治中之切　河原芳子

人のふり見てわがふり直せといふ諺は、夫につかへ、子を育つべき女の身にとりて、片時も忘るべからざる金言なりかし。げにや、他人の醜き姿、あしき振舞などは、氣付き易けれど、おのが姿振舞の、あしくみにくきには、心付かぬものなれど、あるは他人の振をそしり、或はその行をあげつらひなどするものあれど、そはせずもがな。たゞ諺の如く、他人の醜き姿を見、またあしき振舞を聞きたらむには、まづわが身をかへりみて、ゆめ人のことゝ思ふべからず。何事もよくつゝしみて、この諺を忘れぬこそよけれ。すこしく悟るふしありたれど、かきつけて、おのが心を戒むるになん。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

慎獨といふことを支那人は稱けども、わが大和の國の神のさつけたまひしたましひは、いとめでたくいとたふときものにしあれば、朝夕に三度わが身をかへりみて慎むことは、神ながらのみちになんありける、あなめでたき神のみたまをうけて生れいでし大和の女郎花なれば、男花の打まねきてもたわれ心なくして、自ら戒むるは神理にもありける、外國人のかけても及ばぬ松の操は、仰げば高きがごとく、内地雑居はちかつきても、自戒をわすれぬぞ、大和の女郎花といふべき、

山田きよ子

世は花ざかりの春となり、様々の花咲きこぼれ、柳は眉を作り、山のはは笑ひをおび、いづこも春ならざるはなし、されば、女子もやがては春色にほこり香にほこり、あだなることに心をそめ、若草の若きにまかせ、いたづらに月日をすぐすうち、ひま行くこまのあしはやみ、いつしか秋風そよと立ち枯草と成果つるこそ口惜しき限りなれ、すべて女子たる者は、心をときはの松にちかひ、操を正しうせば、やがては花咲き實をもむすび、貴き人と成り行くべし、げにつゝしむべきは人界の春なり、されば、よく〳〵まなびの道に心をこめ、我身をかへり見、はづることろなきやう身を守り、つゆほどもあだ草にそまぬこそ、誠の女子の心なれ、

河村君子

我かくして賢母となりうるか、我かくして良妻となりうるか、學びの道を心得たりとも、いかで賢母となることをねん、みめかたちすぐれたりとも、いかで良妻となることをねん、まいて學びの道の淺き我、みめかたちのすぐれざる我、いかにして賢母良妻となりうるか、學びの道は淺くとも、怠らず學ばば心得べく、みめかたちすぐれざりとも、行正しからば耻づるに足らじ、孟氏の賢母たる、褒姒の良妻たるは、他なし、よく柔順にして子女を養ひてこそ賢母たれ、よく温和にして親夫に仕へてこそ良妻たれ、いさゝか學びの道を心得ば、ものしり顔をなし、すこしくみめかたちよければは、ほこりがほなすは、女子の常なりけり、たとひ我學びの道をいさゝか心得たりとて、かく爲べからず、我みめかたちすこしよければとて、かく爲べからず、子女を養ふ道を知らず、親夫に仕ふる數を心得ずして、我よく賢母となりうるか、我よく良妻となりうるか、

錦野りき子

嗚呼あやまりたりき〳〵、何をかうらみそれみ且つなげきかこつ事やあるべき、これ皆おのれの德なく智なければなり、よろづにつけ、父母のみこゝろをいためまつりしかしこさ、今よりは一入いそしみはげみ、心のにごりをきよめ、如何でか御恩の萬分の一だに報いまつらでやあるべき、實にいつまでかくてあるべきぞ、

名取正代子

凡男子は稼穡を務めて、已も食し人にも與へて飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として、自らも着人をも暖ならしむ、賤きに似たれども人倫の大本なり、天の時に從ひ地の利により、各其務むべき業をはげみて怠らざるは國民の義務なり、されば、我身のやむごとなからんにも、まして數ならざらんにも、何とて務むべき業のなくてやはあるべき、さるを、己はたらちれの深き惠と、師の君の懇なる御敎とにより、やう〳〵學の業も一わたりは爲をへて、物事の理とへやゝわきまへたるに、そが萬分の一に報いんとも せで、徒らに花月の業に耽りつゝ、將遠つ祖の遺し給へる財寶を受くるを恃みて、みだりに費し、今こそ萬に足らはぬ事なけれと、驕りの心とへ長じはてゝ、貯ふべき術もしらず、何すとしもなくあかしくらしつるとの、我ながらあさましききよ、かくていよ〳〵愼まざらば、富貴は浮べる雲の如く、榮華は風前の花に等しくして、終に家をかたふけ身を亡すに至りぬべし、つゝしむべきは驕る心にあり、いましむべきは怠にあり、されば、かく拙き身にしあれど、今より何事にまれつとめはげみて、よろづ外に求めたのむなどの心持たざらんには、いつかはなしはつべき一ふしもなどかなからざらんと、みづからかへりみるも、今更はづかしきかぎりになん、

黒澤きゑ子

人たるものゝ賢きと愚なるとの別るゝも、二葉なる庭のよしあしによるものなれば、母たるものゝ、わきて心を留むべきは、子を敎ふる道にそある、こは誰人もよく知りながら、行ひ難きは、其子の愛らしきにつれて、知らず其が敎のおろそかに流るゝによるなるべし、されは、古の人も、子を敎ふるには嚴かなるをよろしとすと云はれたるも、實に理にこそ、われ楠公訣別の圖と、孟母が機を斷つ圖とを、朝な夕なに見て、自ら顧みるも、子を敎ふる道に背くことのあらざらぬかと、戒しむるになんありける、

社頭祝　　山田瑞子

千代かけて猶も仰かんさかき葉の
さかゆくみやの神の御かけを

名所花　　同人

ゆきて見ん奈良の都の八重さくら
むかしなからに匂ふさかりを

早春眺望　　佐々敏子

見わたせば遠の山の端かすみけり

菫

うち霞む野邊の芝生に咲きいでゝ
　ゆかり色こきつぼすみれ哉　同人

殘鶯

深山路の木かげに今やのこるらん
　うらめづらしく鶯のなく　同人

春雨降る日

すぎゆきしむかしの事の忍ばれて
　降る春雨にそでをぬらしつ　秋田秀子

泊花

こよろぎの磯山櫻咲くころは
　漁の小舟もたのしかりけり　日高かず子

閑居讀書

門さして浮世をよそに見る文の
　中にまことの道はありけり　同人

首夏山家

夏ながらまた袖寒きあさかぜに
　ちる花もあり深山べのさと　同人



●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

……………………
……………………
……………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　住所　姓名

……、……、……。……
……、……、……。……

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

金銀摺彩色表紙
大和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢
郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女か盡すべき本分を明にせるもの之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

杉谷正隆編

修身百首

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製御歌挿入　全壹冊　●實價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに先帝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして事蹟尚湮晦に屬し聖德未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の實歷談に依り以て汎く逸聞事蹟を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示せむ左の如し

御一代　の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明　の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成　の章は御幼時の御言行を示し

慷慨　の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤　の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御　は識見卓出の實際を明らかにし

豁達　は言路洞開の聖德を輝かし

忍耐　は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛　は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖德を頌し奉る**

國民たるものゝ必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料添附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		
一冊	拾錢	全國無遞送料
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十二年五月九日印刷
明治三十二年五月十日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木良雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號新橋八八) 國光社

紅塵庵俗禪譯 ● 富岡永洗筆挿繪數圖頗密畫無比極彩色口繪！！

總クロース金文字入 ▲菊版美本▼ 正價金五十錢 郵稅金八錢

●全一册●

國乃譽 獄(ひとや)の花(はな)

四版

清風高節 秀美優雅

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇內に發揚し最名譽ある儀表の下に最淸廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尙なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が淸淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

▼▼▼▼▼▼▼試に本書所載の目次を揭ぐれば……

國のほまれ ひとやの花 目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
（電話番號新橋八八）
●發行所 國光社●

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 國光社印刷部）